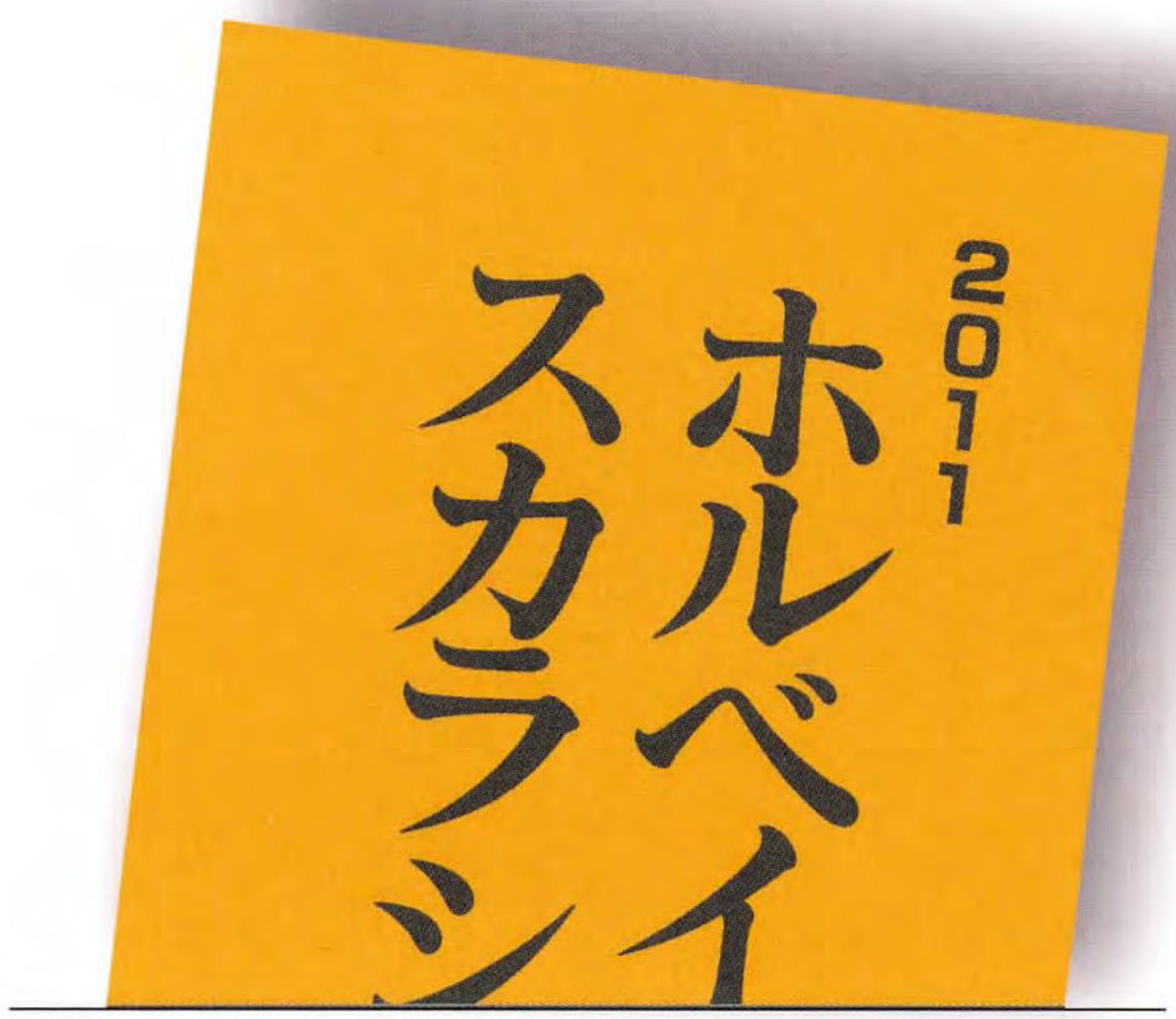
ACRYLART

アクリラート別冊2011



The Scholar 20 Perspective

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊２０１１

holbein

ごあいさつ

素材の提供を通じた若手アーティストの支援、という目的で1986年に始まりましたスカラシップ奨学制度も、本年度の募集で26回目を迎えます。
歴代奨学者の数は延べ1000人に達するほどになりました。当時学生だった初期の奨学者たちは今や押しも押されぬベテラン作家となり、国際的なアーティストとして幅広く活躍されている方も少なくありません。美術の動向や取り巻く環境、人々のアートに対する意識も刻々と変化してきたこの25年の間、素材の提供者である私たちも、「新製品」いうかたちで時代が求める数々の絵画材料を世に送り出してきました。
しかし素材が素材としての役目を全うするのは、あくまでそれが作品の一部となったときです。新しい絵具を作家はどう解釈し、どう使いこなすのか。作家独自の創意により、時には私たちが思いもしなかった素材の潜在能力が引き出されることもあります。奨学制度の始まりは、アーティストたちと歩みをひとつにして素材の研究をしていきたいとの思いからでもありました。
そうして、四半世紀前に比べると現在では素材の選択肢もずいぶん増えています。古典の時代から変わらない伝統的なもの、最新科学から生まれた現代的なもの、またそれらを併用して生まれる新しい表現。使う作家によって同じ素材でもさまざまな姿に変貌してゆきます。それを検証しつつ、より良い製品の開発や改良につなげてゆくのが私たち提供者の役割だと考えています。
この冊子は、第24回スカラシップ奨学者20名の作品集です。まさに今を生きるアーティストたちはどのような素材で現代をどのように表現しているのか。そんなことも意識してご覧いただければ幸いです。

2011年7月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第24回奨学者（五十音順）

浅井冴子 ASAI Saeko 12 · 34

今林明子 IMABAYASHI Akiko 13 · 37

榎木陽子 ENOKI Yoko 14 · 40

大田ゆら OHTA Yura 15 · 43

笠井麻衣子 KASAI Maiko 16 · 46

釘町一恵 KUGIMACHI Kazue 17 · 49

国吉晶子 KUNIYOSHI Akiko 18 · 52

興梠優護 KOHROGI Yugo 19 · 55

齋藤瑠璃子 SAITOH Ruriko 20 · 58

酒井香奈 SAKAI Kana 21 · 61

坂本紀恵 SAKAMOTO Norie 22 · 64

佐藤　翠 SATOH Midori 23 · 67

鈴木ゆかり SUZUKI Yukari 24 · 70

武内明子 TAKEUCHI Akiko 25 · 73

田中秀介 TANAKA Syusuke 26 · 76

中島　麦 NAKAJIMA Mugi 27 · 79

福島沙由美 FUKUSHIMA Sayumi 28 · 82

MASAKO 29 · 85

松本菜々 MATSUMOTO Nana 30 · 88

吉住　暁 YOSHIZUMI Aki 31 · 91

The Scholar 20 Perspective

Works

第24回奨学者の作品



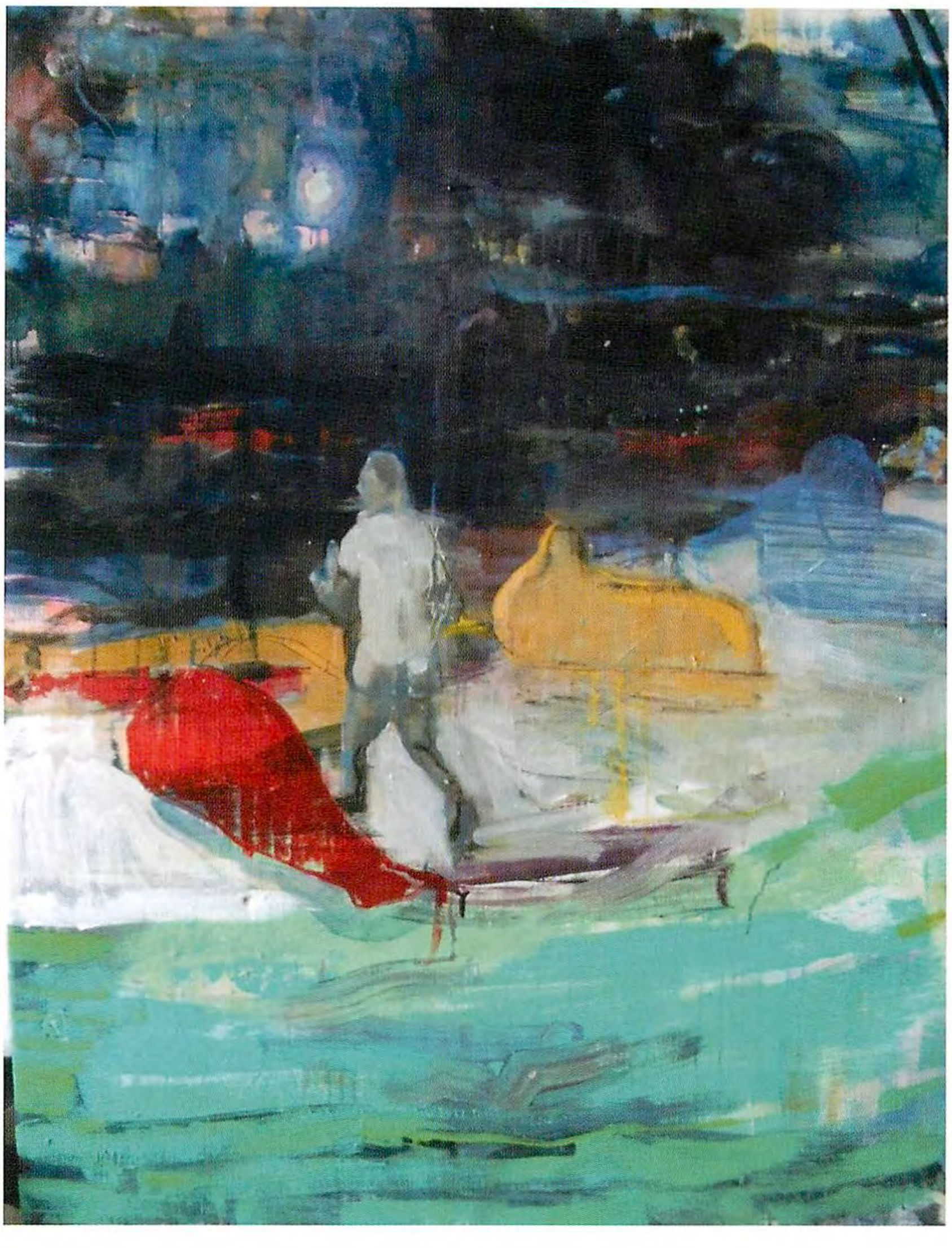
浅井冴子

melt dreams
綿布、アクリル
60.6×72.7㎝
2009年



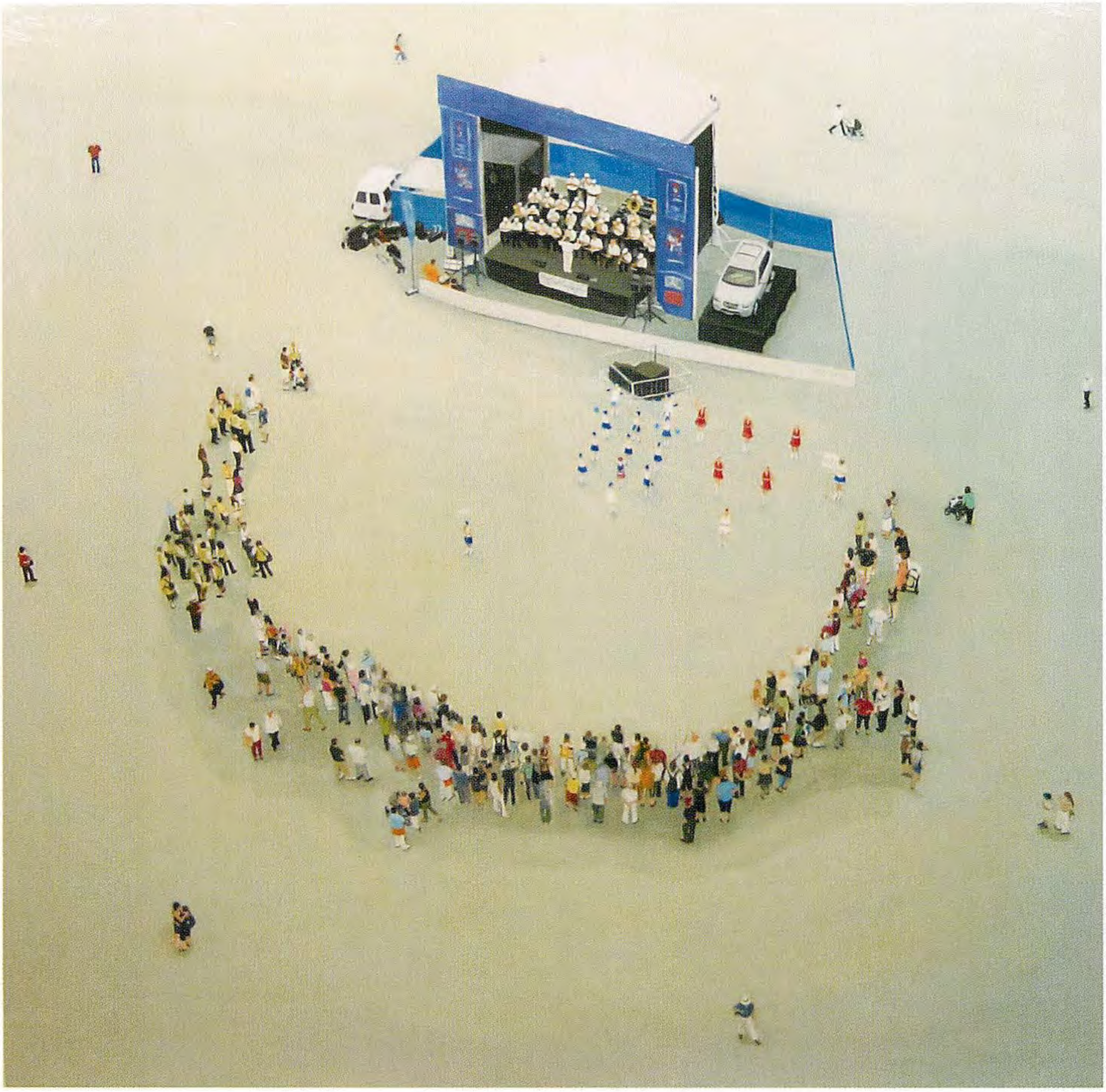
今林明子

永久と瞬き
パネル、綿布、白亜地、油彩
162.0×162.0㎝
2010年



榎木陽子

シティランナー
キャンバス、油彩
116.7×91.0㎝
2010年



大田ゆら

ひと
キャンバス、油彩
162.1×162.1㎝
2009年



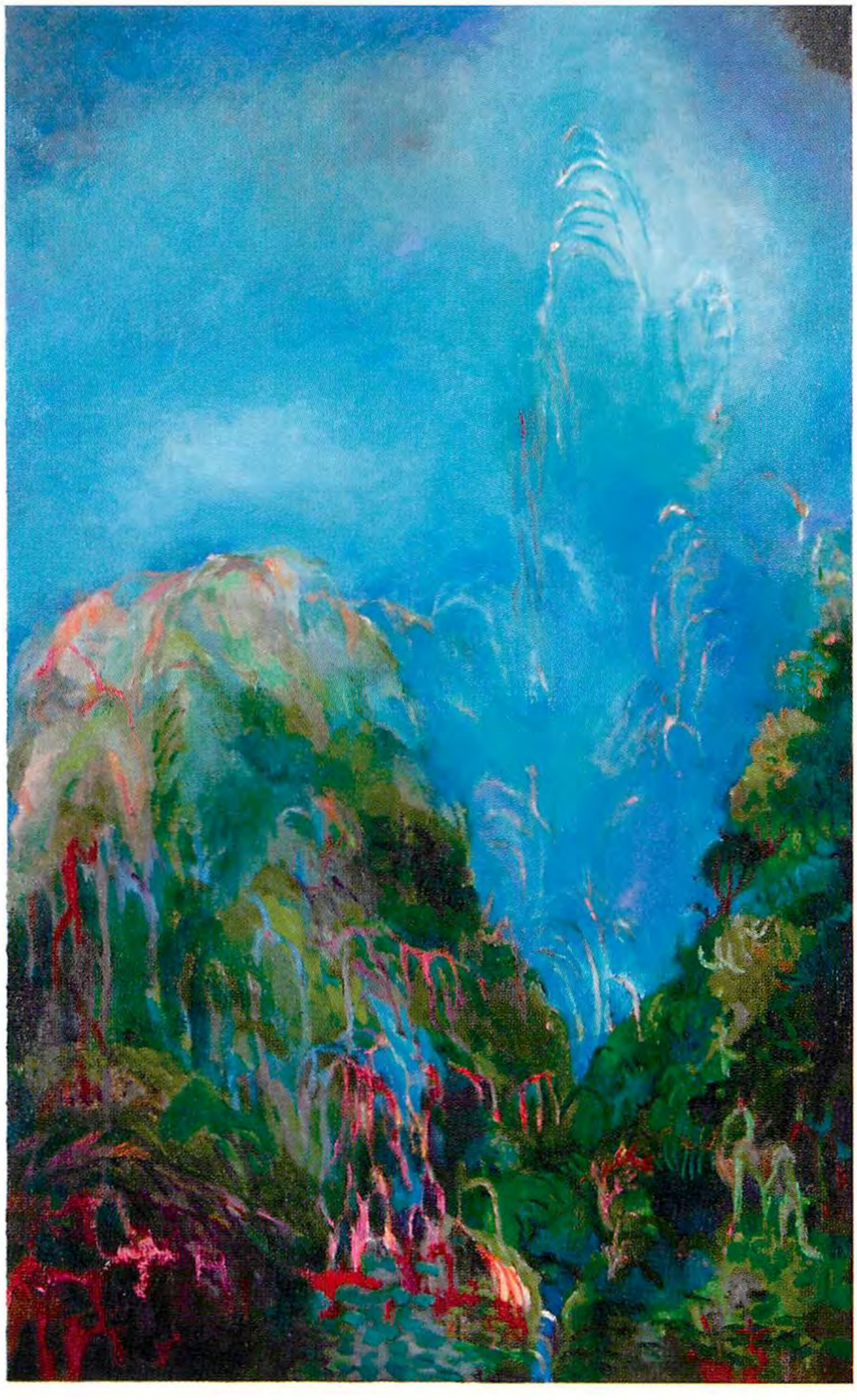
笠井麻衣子

The entrance

キャンバス、油彩

162.0×130.3㎝

2011年



釘町一恵

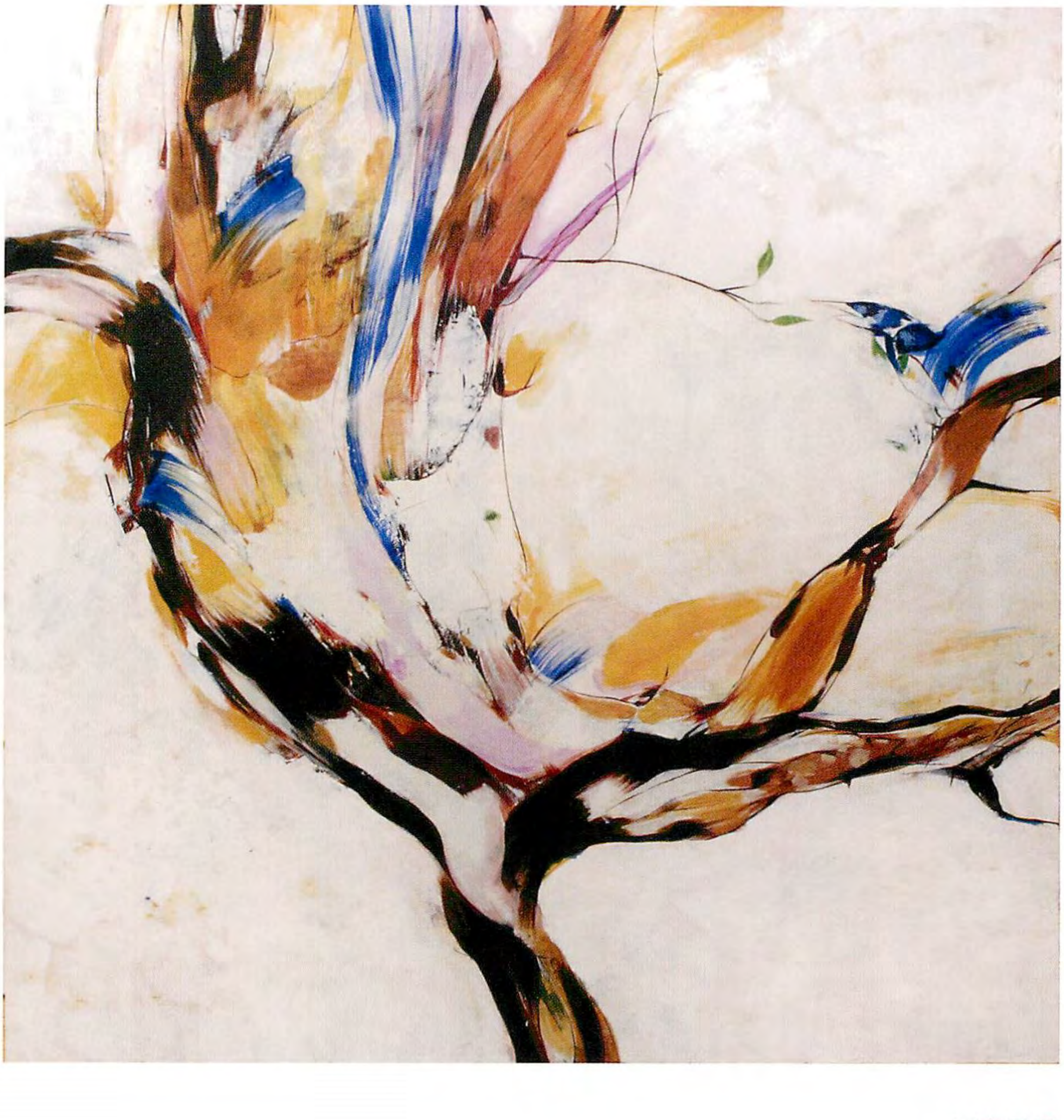
sign-渕源 I

キャンバス、油彩

130.3.×80.3㎝

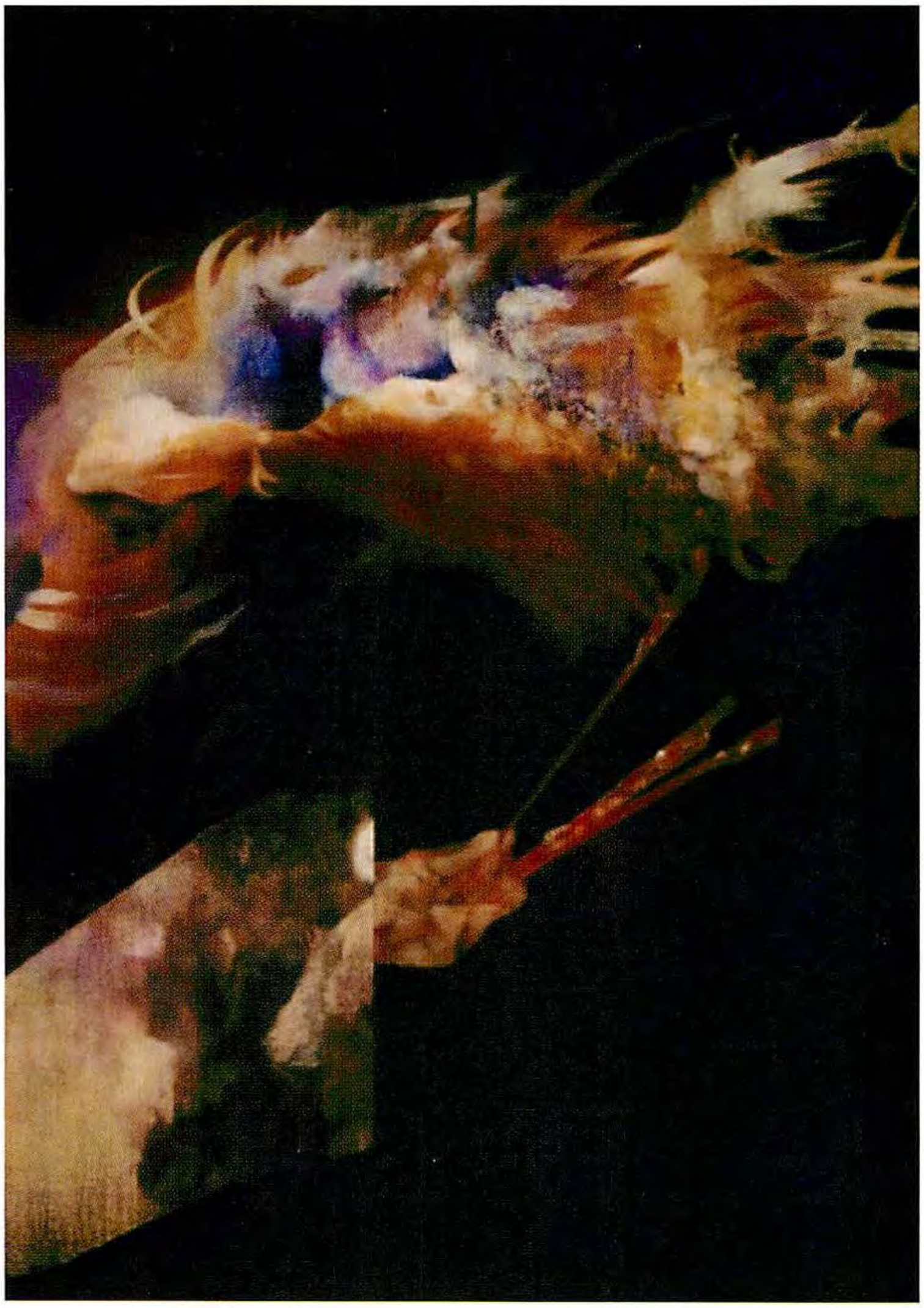
2010年

photo by 佐々木悦弘



国吉晶子

青い鳥
キャンバス、油彩
145.5×145.5cm
2010年



興梠優護

Smoke sp
キャンバス、油彩
116.7×80.3㎝
2010年



齋藤瑠璃子

Zoukibayashi Obake 02
キャンバス、油彩
194.0×130.3㎝
2011年



酒井香奈

ねむりのもりのながいよる
パネル、寒冷紗、石膏地、アクリル
180.0×130.0㎝
2010年

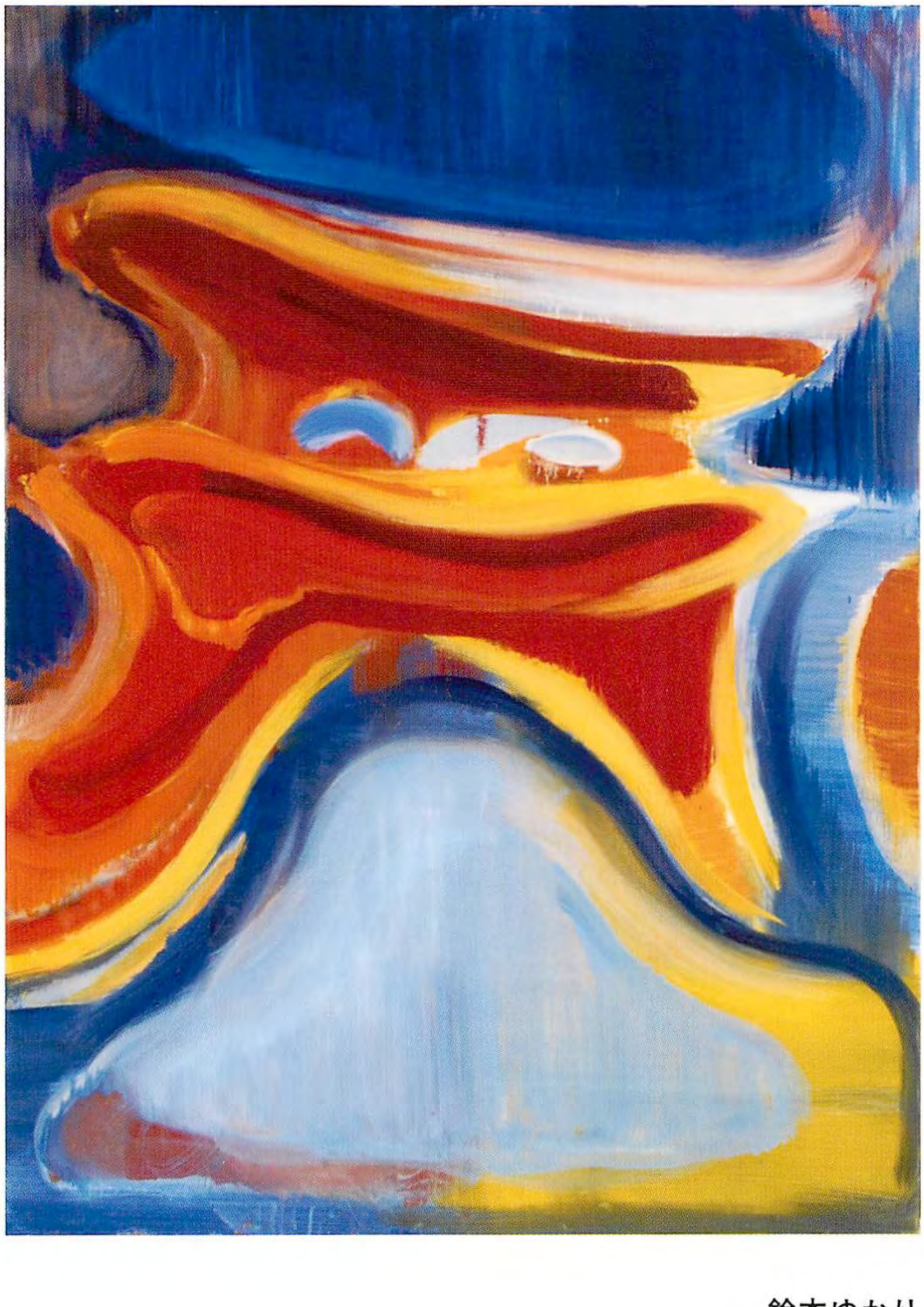


坂本紀恵
トンネルの向こうで“それ”が待っている
木、油彩
72.0×72.0㎝
2008年



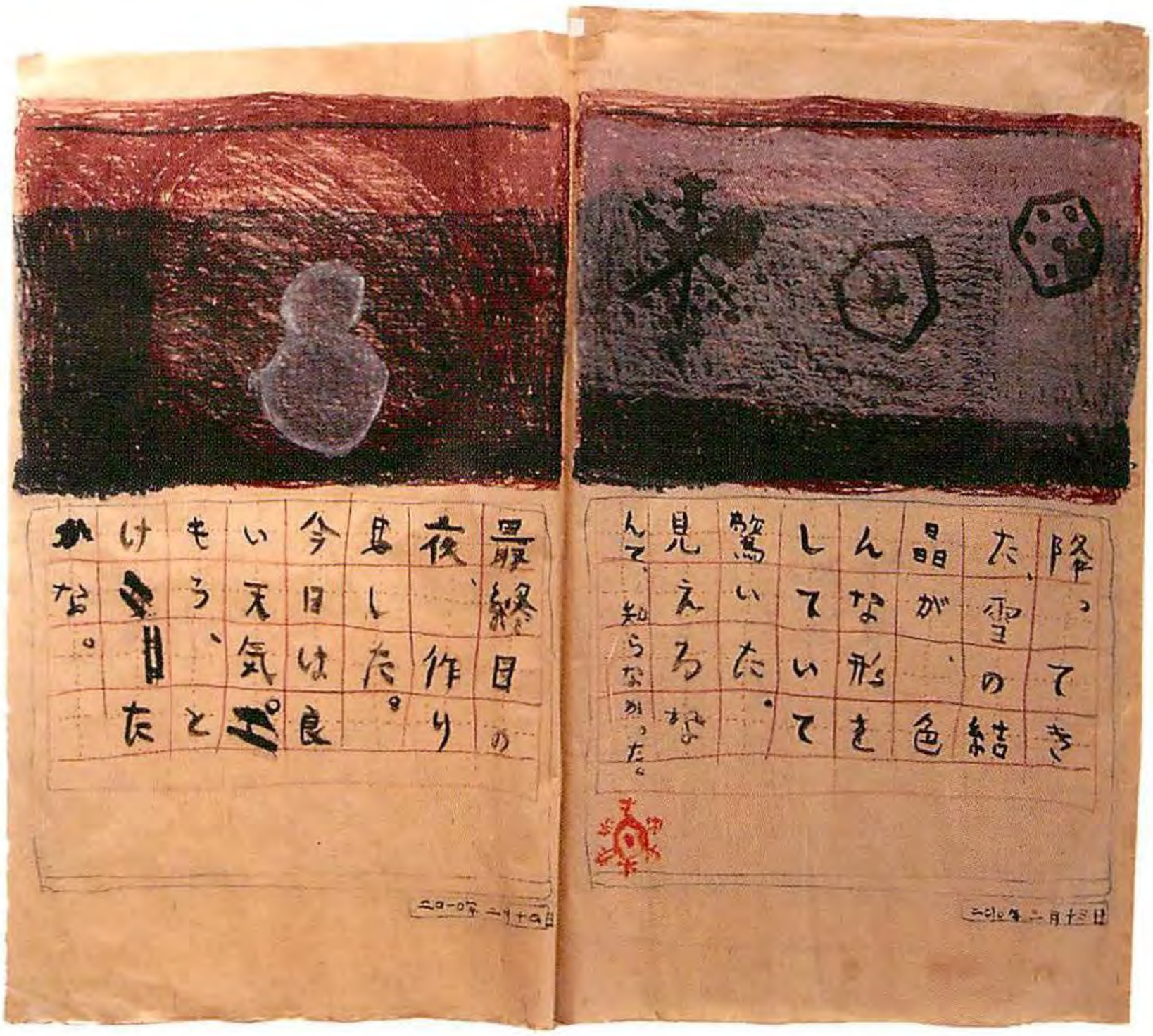
佐藤　翠

Red closet
綿布、アクリル
194.0×133.0㎝
2010年



鈴木ゆかり

boundary
キャンバス、油彩
145.5×112.0㎝
2010年

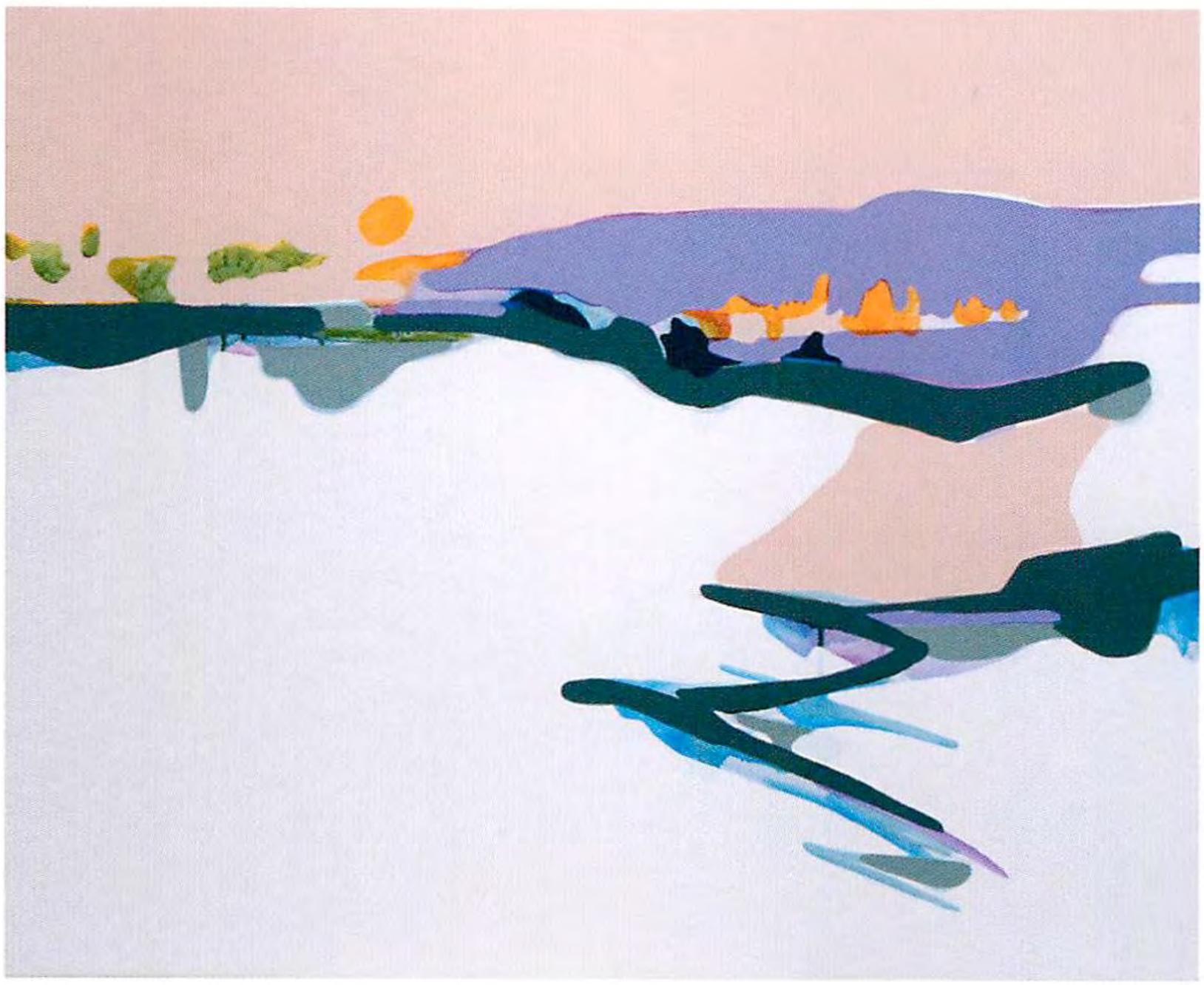


武内明子
新潟旅日記　5-6日目
宣紙、リトグラフ、モノタイプ
75.0×90.0（見開き）×1.0㎝
2010年



田中秀介

瞬く咄嗟
キャンバス、アクリル
72.8×103.0㎝
2011年



中島　麦

僕は毎晩、2時間旅をする
キャンバス、アクリル
65.2×80.3cm
2011年



福島沙由美

風懐鏡
キャンバス、油彩
162.0×162.0㎝
2010年
photo by　橋本憲一
（佐藤美術館所蔵）



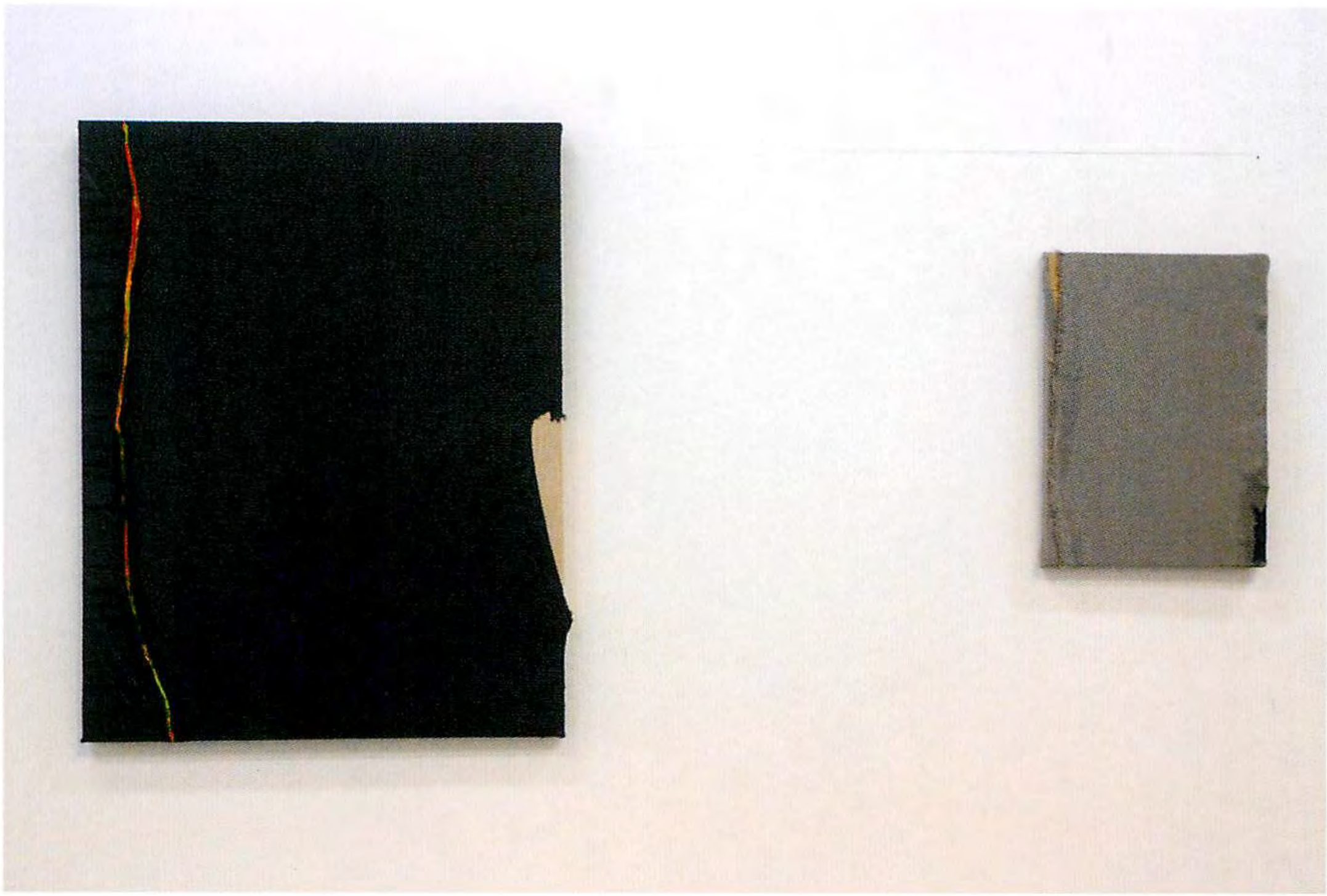
MASAKO

RED CARPET

キャンバス、アクリル、油彩

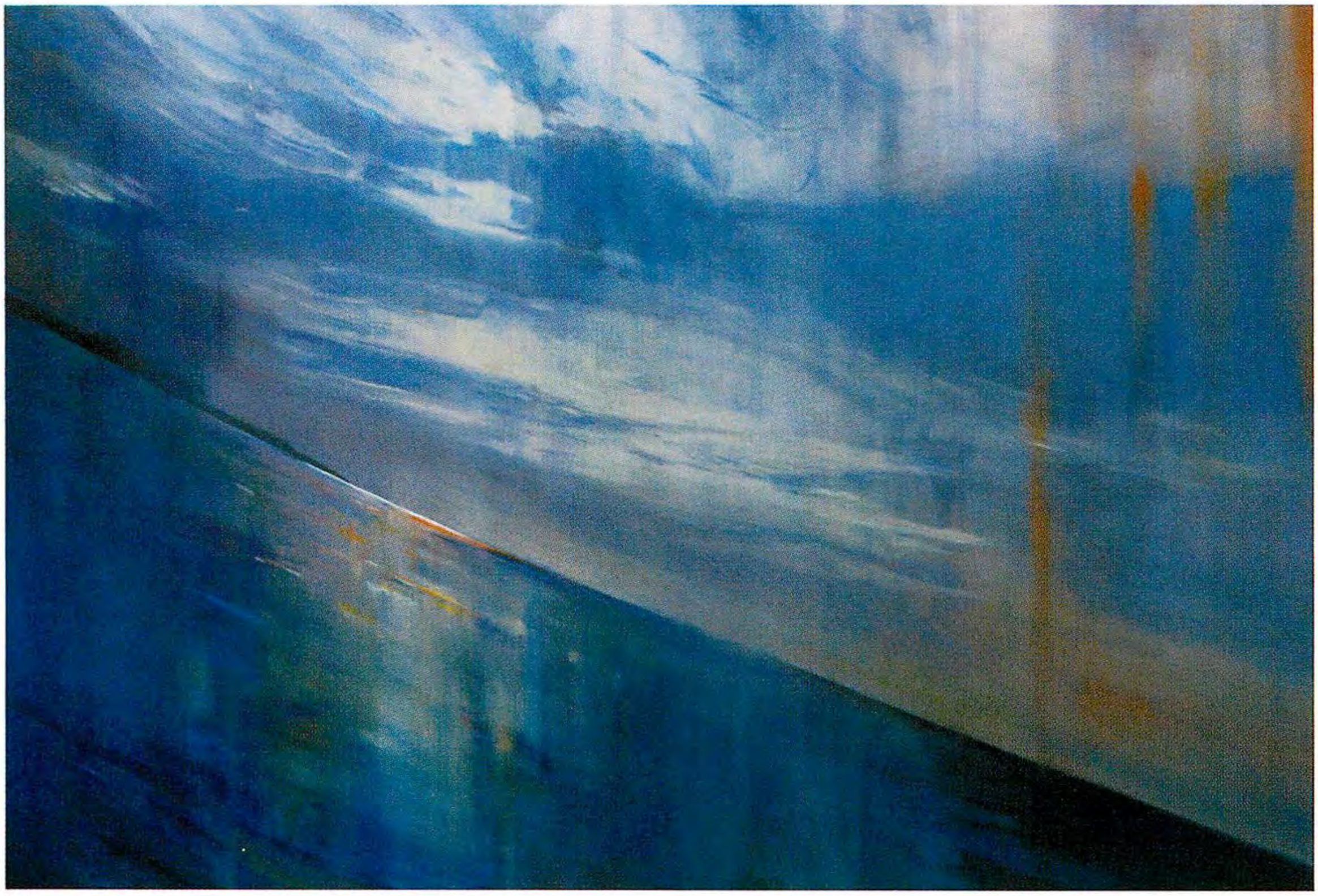
130.0×162.0㎝

2010年



松本菜々

Sequence #1
キャンバス、綿布、麻布、油彩
右：33.4×24.3㎝
左：60.5×50.0㎝
2011年



吉住　暁
鮮やかな匂い
キャンバス、油彩
130.3×194.0㎝
2011年

The Scholar Perspective 20

Report

第24回奨学者のレポート

浅井冴子

ASAI Saeko

一枚の絵　流れにいだかれるように

数年前、20歳前後のころ。ある作家の評伝を読み、そこで「絵描きとしての生涯を飾るにふさわしい一枚の絵」といった言葉を目にしてからというものの心のどこかでこだましている。

自分ならどういったものが描けるだろう？何を生み出せるだろう？

それはいつ生まれるだろう。

「見たい。」

大家の代表作をではなく、自分自身の人生を飾る一枚の絵こそを絵描きは求めるべきなのだろう。課題であり望みのようにも感じられる。心から自分を納得させ満たしてくれるような一枚とはどんなものであるか。

（これが最高傑作、と考えた瞬間に絵描きとしての死が訪れるというにしても）

繰り返す肯定と否定の先に少しずつ近づいていく。現在のスタイルを得たことは学生時代の最後の最後に与えられた褒美のようなものだった。

キャンバスの上の格闘の末にみえる風景に、筆触のもたらす恍惚に、刹那の対話に夢中になる。流れの中に身をよせ投影する。意識は絵のなかに消える。無理がなく、自分らしい姿のように感じられた。そしてそれは間違いなくある時期のひとつの解答だった。

時すぎて2010年。大学院を卒業した私は大学と実家という主要であった二つの環境から出ることになった。労働し生活することがどんな影響を自分にもたらすかは興味深かったが、結果としては政治や歴史など外向きの物事に少しばかり関心を抱くようになり、それは全くの意外なことであったのでます絵描きとしての私はどこへ向かっているのかと思うのだった。

しかし考えてみる。あらかじめ完成図を決めて駒を進めることは効率的で素晴らしい手法だけれども、「わからない」という想定を超えるものに近づいていくことで何かしれないと。そんな心境になってふとみると、絵もそうして描かれているように感じて少し笑う。

観客になることはたやすく、舞台に上がることは難しい。しかし少なくとも絵を描くという行為は、私・絵描きをひとつの壇上に立たせそこで自分の生を体験させるだろう（その規模がどのようなものであっても）。

この世界で、本当に価値があるものとは？

人生を飾るにふさわしいその一枚の絵について考える。



past days
綿布、アクリル
37.9×45.5cm
2010年

white garden
綿布、アクリル
45.5×37.9㎝
2010年





浅井冴子

1983年　大阪府生まれ
2007年　多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業
2009年　多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程絵画専攻修了

グループ展他

2010年　トーキョーワンダーウォール公募2010入選作品展　東京都現代美術館／東京
2009年　Emerging Artists2009　gallery Q／東京
浅井冴子・新田友美展　Tokyo American Club／東京
シェル美術賞展　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
Bloom　Art Jam Contemporary／東京
アミューズアートジャム2009　京都市文化博物館／京都
山本冬彦コレクション展　佐藤美術館／東京
2008年　co-core　Art & Design国際講評会　精華大学美術学院／北京[中国]
viaart2008　シンワアートミュージアム／東京

今林明子

IMABAYASHI Akiko

対極の間で

何気なく過す日常の中で、ふとした瞬間に沸き起こる不安や虚無感。これは眼前に迫る大きな壁のようなものではなく、もやもやとした薄い膜や霧の類で、実体を持たない。実体が無いからこそ恐ろしく、そして心惹かれるのだ。

私はこのような日常の中にある感覚的な不安や虚無を表現しようと現在のシリーズに取り組んでいる。その中で自然と移ろう「光と影」に表現のヒントを見つけていった。

私はもともとキラキラ光るものが好きだ。幼少期からスワロフスキークリスタルのキーホルダーに太陽の光をかざしたり、プリズムで虹を作って遊ぶのが大好きだった。また、真っ暗にした部屋でぼんやりと映し出されたスライドを見るのも楽しみであった。

今の制作に取り組むようになってから過去を思い返してみると、光の記憶が非常に多いことがわかった。そして、「光の記憶」は同時に「影の記憶」でもある。光がキラキラと輝くのはそれを際立たせる影が存在するからだ。光を強く求めれば求めるほど影の存在がついてくる。そして、影の方にこそ私の表現したいものの本質が隠れているのではあるまいか。

「光と影」という対極にあるものに惹かれながら、常にその間で揺れている。そして、作品について、自分の表現したいものについて考えていくうちに、「光と影」の他に、私の中には対極にある要素を一つの作品に取り入れたい欲求があることに気づいた。

「強いものと儚いもの」
「永遠と瞬間」
「確かなものと不確かなもの」
「広がりと収縮」
「生と死」

対極にあるものの間を行ったり来たりしながら、私は描くことを通して、日常に埋もれた何かを探っている。



翳りの予感
パネル、綿布、白亜地、油彩
116.7×91.0㎝
2011年



揺らぐ世界の証明
パネル、綿布、白亜地、油彩
130.3×194.0㎝
2009年



今林明子

1985年　福岡県生まれ
2008年　福岡教育大学美術科卒業
2010年　佐賀大学教育学研究科修了

個展

2011年　アートプロ・ガラ／福岡（中央区）にて6月28日～7月23日迄開催予定
2009年　ギャラリーおいし／福岡

グループ展他

2011年　第46回昭和会展　日動画廊／東京
2010年　IMAGINE-01α　―ギャラリストがつなぐ若手作家たち―　九州産業大学美術館／福岡
　　襞と鏡　ギャラリーおいし／福岡
　　第8回前田寛治大賞展　日本橋高島屋美術画廊／東京、倉吉博物館／鳥取
　　AICHI GENE -some floating affairs-　愛知県立芸術大学芸術資料館／愛知
2009年　第6回はるひ絵画トリエンナーレ　清須市はるひ美術館／愛知
　　第27回上野の森美術館大賞展　上野の森美術館／東京
　　トーキョーワンダーウォール公募2009入選作品展　東京都現代美術館／東京
2008年　第27回損保ジャパン美術財団選抜奨励展　損保ジャパン東郷青児美術館／東京
　　第9回春季二紀展　東京都美術館／東京（'10）
2007年　第61回二紀展　国立新美術館／東京（'08～'10）
　　ACRIL AWARD 2007　O美術館／東京

http://www7b.biglobe.ne.jp/~akiko-works2007-/

榎木陽子

ENOKI Yoko

切実で真剣な日常

～お前はお前やがいとばあちゃんは言う。～

今夜もどこかの工場で、誰かが寝ずにひどく便利なものを作っているに違いない。合成ゴムを均等に裁断する機械から、ゆで卵の殻を容易く剥いてしまう器具までいろいろと。自分が生きるこの空間は、とにかく意味の無い物があふれすぎている。説明の洪水は、防波堤をゆうに超えて、うんざりするような文章に浸水された地点に私は佇んでいる。

「説明」という職務をかたくなに全うするつもりでいる文字の羅列からその機能を奪ってしまいたい。文字の意味を理解しなければ少しは楽しめるのかもしれないから。ただの形だけのそれとして。

簡単に暮らして、いつも自分のことだけを考えていたい。様々な戦争や諸々の不幸のはじまりは必要の無いことを知ることにあるってガンジーも言ってたよ、ってまたひとの話だけど。

とにかく人とかかわりたくてしょうがない。発信して、反応を待つ。

何かを作りだすことは世界の中に波動をおこすこと。

何かを作り出すことは世界の中に波動をおこすこと。

本当の話をしたい。本当のことを、自分の言葉で話したい。

安易なうそやおかしさ、その不誠実さと理不尽さにむかつきを覚える。

自分が真剣につくって、自分だけがその責任を取る、簡単な話。

今日、ホルベインさんから一通のメールが届いて、請求の締め切りが過ぎているとの連絡を受けた。

急いで書いて送る。

モテる男のヒトっていうのはこういう気持ちになるのかな。

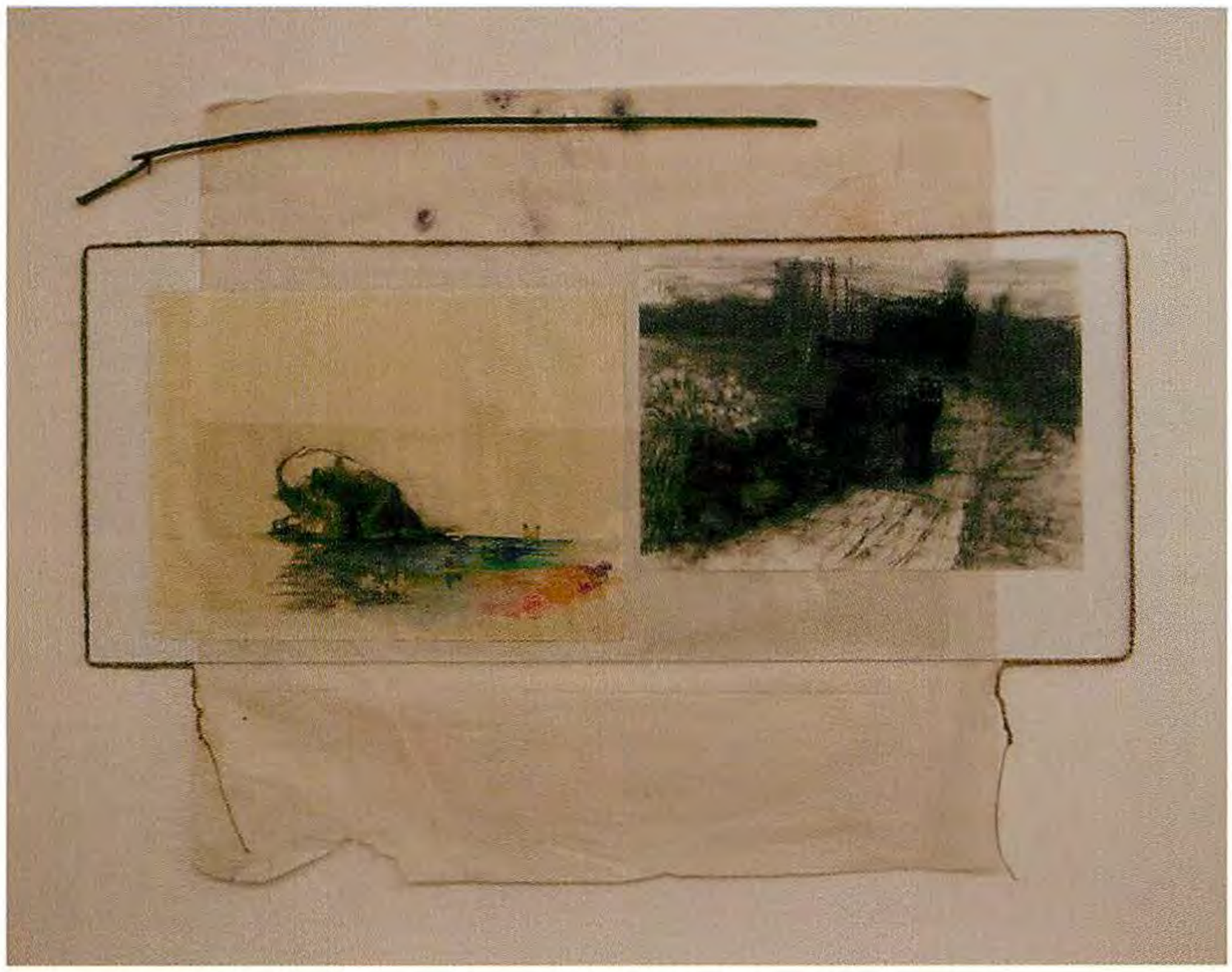
やれやれと言いつつ、いそいそと郵便局へ向かう。

こつこつと一人で作業をこなしている瞬間

の連続。世界のどこかと繋がっている事実を確認する。あるいは、その瞬間に救いが生まれると信じる。



Café le Routier
キャンバス、油彩
91.0×116.7㎝
2008年



Spirits and Landscapes,Grimmuseum、ベルリン、2010(展示風景)
紙、木炭、ガッシュ
30.0×55.0㎝（変形）
2010年
photo by Ada Van Hoorebeke



榎木陽子

1978年　石川県生まれ
2006年　アントワープ王立芸術アカデミーペインティングコース修了

個展
2009年　ギャラリー 砂翁 ／東京
2008年　50/25 Cypres Galerie／ルーベン［ベルギー］
2006年　De Queeste Art／ワトウ［ベルギー］

グループ展他
2011年　前橋アートコンペライブ2010入賞者作品展　旧ウォーク館（美術館予定地）／群馬
Tokyo story vol.1　現代HEIGHTS Gallery Den／東京
2010年　sprits & landscapes　Grimmuseum／ベルリン［ドイツ］、WIELS ／ブリュッセル［ベルリン］
Summer in the city　Cypres Gallery／ルーベン［ベルギー］
2009年　Temporary city／ベルリン［ドイツ］（07'ローケルン［ベルギー］）
2008年　Honorons Honore／メッヘレン［ベルギー］
トーキョーワンダーウォール公募2008入選作品展　東京都現代美術館／東京
2007年　Small stuff　three-Herman Teirlinckhuis／ブリュッセル［ベルギー］
Onland - kilte van de opwarming　Turnhout Cultuurhuis／トルンホルト[ベルギー]
Ver van Eden　フランスとベルギーの国境でのアートプロジェクト／ヴィンカム[ベルギー]、ホンドスホーテ[フランス]
2006年　ELIA　Bijloke／ゲント［ベルギー］
weekend　VoorKamer／リール［フランス］
2005年　Kunst en Cultuur aan huis　在蘭ベルギー大使館／デンハーグ［オランダ］
1% of Life　在ベルギー日本大使館／ブリュッセル［ベルギー］

装丁：雑誌【STREVEN】2010年1月号～12月号

http://www.yokoenoki.com

大田ゆら

OHTA Yura

ある日、ある場所で

私の作品をいくつか見る機会があったひとなら誰もが、「なぜ上から見下ろしてばかりなのだろう…」そう思うだろう。ある一つの場所に点在するひと、もの、ひと、ひと。遠く離れたところから、しかも上から見下ろしているので、ひとの表情はわからない。少し離れたところから作品を見ると、点在するものが、そもそもひとであるということも、すぐには見分けてもらえないかもしれない。

高いところから、広がる景色やひとを見下ろすことで、そのひとが一体どういう理由でその場所にいて、どんな心や感情を持っているのかを知りたくなる。「あぁ、こんな気持ちなんだろうな」とか「こういう役割で存在しているのだろうな」とか、いろいろと想像できてしまう。それは、直感的なものなのか、経験や思い込みからくるものなのか、わからない。でもその瞬間、惹きつけられる心に素直に反応して、自分が見たい感覚、もしくは欲しい対象を自然に選んでいる。そして、描いたものをさらに俯瞰して、整理しようとしている。

『ある場所を描く』ことは、キャンバスの上で『その場所を訪ねる』ことと同じことではないだろうか。今、自分が存在しているところとは全く違う場所が、キャンバスの上に同時に確かに存在する。そして、その作品が、誰かの目にとまるとき、見るひとも、作品を通して『その場所を訪ねている』のではないだろうか。

私が描く対象は、実際に自分が訪れた場所だ。高いところからひとの様子を見下ろせる空間をみつけては、眺めてしまう。それはまるで、自分のいる場所を把握するかのように…。

私にとって、離れたところから見下ろす、ということには大きな意味がある。距離をとり、そして上から見下ろすことによって、普段、生活の中でものを見ている視点や、同じ高さの目線や距離感では見えてこないひとの心の動きを発見することができる。声が聞こえなくても、表情が見えなくても、たとえ外国であろうとも、全身から伝わる

ひとの心が私の興味を惹きつける。

単に地面をブルーに置きかえたり、視界に収まったままにひとやものを描いたりしているのではない。キャンバスというある一つの場所で『ひと』や『もの』はそこに広がる空間を意識しながら存在している。時の長さに関わらず、ひとの心や感覚は、とどまることなく常に変化する。その一時（ひととき）に生まれる感覚を発見し、惹きつけられた心だけがキャンバスの上に残っていくのだ。そして、今まで描いてきた作品を俯瞰して、自分と他者、そして外の世界と自分の関係を把握しようとしている。

一体、私とあなたはどのような『ひと』なのだろうか…。これから時間とともにどう変わってしまうのだろうか…。私にとって、その動いている心をとらえて、残していくことが制作だ。

私と外の世界をつなげる場所がキャンバスの上に広がっている。

たとえ私がそこにいなくても、ある日、ある場所で、絵の具という素材を通してあなたに出会っているのだろう。



ひと
キャンバス、油彩
17.9×17.9㎝
2010年



ひと
キャンバス、油彩
72.7×116.7㎝
2011年



大田ゆら

1982年　大阪府生まれ
2006年　京都精華大学芸術学部造形学科洋画専攻卒業

個展
2010年　とどまる領域　shin-bi ギャラリー／京都
　　訪ねる場所　E&Cギャラリー／福井
2008年　覆う眺め　イムラアートギャラリー／京都
2007年　視点・視界　shin-bi ギャラリー／京都

グループ展他
2007年　熊谷守一大賞展　アートピア付知交芸プラザ／岐阜
2006年　心斎橋・大丸文芸大賞展　大丸心斎橋／大阪
　　シェル美術賞展　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2005年　目の前を、聞く　ギャラリーフロール／京都
　　群馬青年ビエンナーレ　群馬県立近代美術館／群馬
　　トーキョーワンダーウォール公募2005　東京都現代美術館／東京

笠井麻衣子

KASAI Maiko

伝わらない自由

日常の生活の中にある、あらゆるモノの成長や変化を見たり感じたりするのが制作する上でのきっかけになっていたのですが、最近では特に人の行動や人そのものを観察するよりも、誰もいない空間、もしくはさっきまで居たような気配がある場所を見たときに得たイメージを基に制作することが多いです。

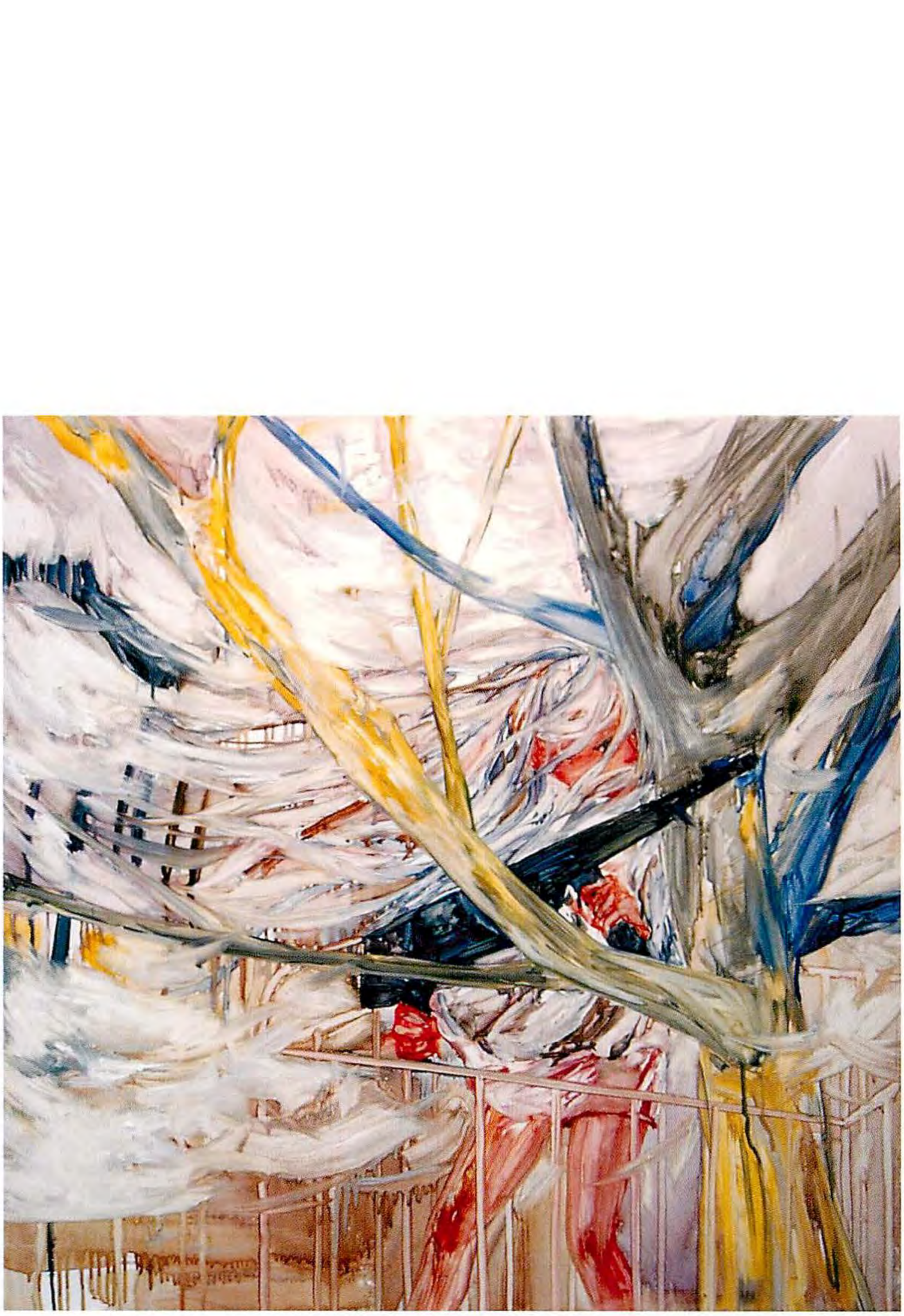
その場所やシチュエーションというのは様々で、自転車でスピードに乗って走るときに横目に入る他人宅の庭やベランダ、夕方過ぎの誰もいない近所の小さな公園、人が通り過ぎた後の朝の河川敷、時々しか手入れされない少し荒れた畑、窓から覗ける誰も居ない部屋、出入りが止んだ後の玄関先、客はいるのに殆どが空いている遊園地のメリーゴーランドなど、日々の生活のシーンに見られる余白のある部分を目にすることが起点になります。

私は、私自身が練り上げた物語と仮構性を絵画に込めたいと考えています。きっかけとなる風景を設定に置いて生まれるモチーフを、実際のシチュエーションからは考えにくい脚色されたストーリーを組み込み、イメージそのものを変換することで、それらが本質的に持っているドラマティックさとその物語上での生活するための訓練の必要度や、社会的に制御された側面を表現できるのではないかと思うのです。ただこれら は、殆ど一度塗りしか施さない必要最低限の油絵の作業量と、短期間で作る筆致の表象によって、作り手と鑑賞者の間でイメージが引き離されるケースがあるとも考えられます。

絵画という媒体は、自己のイメージを他者に伝達することに適していると思います。しかし最近では、伝わらない要素が発想の自由の幅を広げているといえば良いのか、イメージや物語が率直に伝わらないという不可能性によって、鑑賞者による新たな創造がうまれ、様々な価値観が拡大・分散されていくのではないかと考えています。

現実世界で見たシーンから、時間をかけてストーリー性を重視した絵画にもっていくことはあるし種、眼前にある風景との断絶です。そして、一瞬のストロークと筆致を活かし最低限の仕事量で仕上げられるペイン

ティングと、私がイメージを作り上げていった時間や物語との二度目の断絶を迎え、作品が眼前に広がるのです。



Basic training
キャンバス、油彩
72.7×72.7㎝
2010年

闇の果実を追う時間
キャンバス、油彩
181.8×227.3㎝
2009年





笠井麻衣子

1983年　愛知県生まれ
2007年　金沢美術工芸大学美術工芸学部油画専攻卒業
2009年　金沢美術工芸大学大学院修士課程美術工芸研究科絵画専攻油画コース修了

個展
2011年　Place no one knows　YUKA CONTEMPORARY／東京
2010年　Fundamental Training　YUKA CONTEMPORARY／東京
2008年　GALLERY b.TOKYO／東京
　　葡萄夜／石川
2005年　彗星倶楽部／石川

グループ展他
2011年　第30回損保ジャパン美術財団選抜奨励展　損保ジャパン東郷青児美術館／東京
2010年　アーツ・チャレンジ2010 新進アーティストの発見inあいち　愛知芸術文化センター／愛知
　　アトリエシリーズ第7回西脇市サムホール大賞受賞作家展vol.2優秀賞　西脇市岡之山美術館／兵庫
2009年　New Artists 2009　Gallery Jin Projects／東京
2008年　本の時間・絵の時間　金沢市立泉野図書館／石川
　　第7回全国公募西脇市サムホール大賞展　西脇市岡之山美術館／兵庫
　　シェル美術賞展2008　代官山ヒルサイドフォーラム／東京、京都市美術館別館／京都
2007年　8つかど展　グリーンアーツギャラリー／石川
2006年　Strange World　ギャラリー忙中閑有／石川
　　トリエンナーレ2006公募神峡美術展　富山市大沢野生生涯学習センター／富山
2005年　ファイル展2005　彗星倶楽部／石川

http://kasaimaiko.com/

釘町一恵

KUGIMACHI Kazue

ｓｉｇｎ―淵源

作品のテーマとなっているｓｉｇｎ(気配、兆し)とは、人や命を描く際に人の形をとらずに、その気配のあらわれを描きたいという想いから付いている。

昨日まで笑いかけ、話しかけてくれていた大切な人が、今朝には逝ってしまい、もう二度と会えなくなる。そういうことが、日々、生あるものに等しく起こる。

だから生きているのは奇跡。生まれくるのは奇跡。生まれくるのは奇跡。

生きていくのに確かなことはなく、そこに在る、そのこと自体も脆く儚い。けれど、圧し潰されるほどの悲しみを、幾度となく洗い流してくれるのは、圧倒的な生命(いのち)の力。形のないその気配を、しるしを求め続け、その力によって生かされている。

たくさんの血と一緒に

肚から出てきた

自然の大きな力の

光と色の洪水

海と引力と子宮

大切な人の声の記憶

逝ってしまった人の気配

生命(いのち)を繋ぐため、私を求める気配

それらを感じる時、生きる喜びで満たされる。生あるものの明滅する気配、兆し、しるしを表現してみたくて日々挑み墜落する。

そして今、逝ってしまう命を追いかけているうちに、手中にある珠を見出した。

それもまた儚い一瞬の命。

それに気付いたとき、この身の周りのすべてが、一斉に生と死を繰り返している様に鳥肌が立ったのだ。

日常の連なりが、そのまま生命(いのち)の極(きわ)に立つ連なりだったことに。

淵源―神立つ淵に



sign-渕源 II
キャンバス、油彩
130.3×80.3㎝
2010年
photo by 佐々木悦弘



sign-Eros
キャンバス、油彩
130.3×80.3㎝
2009年
photo by 佐々木悦弘



釘町一恵

1970年　東京都生まれ
1993年　武蔵野美術大学油絵学科卒業

個展

2010年　なびす画廊／東京
2009年　画廊からの発言-新世代への視点2009　なびす画廊／東京
2008年　なびす画廊／東京
2004年　なびす画廊／東京

グループ展他

2011年　Mama Set　世田谷美術館区民ギャラリー／東京
GALLERY HINOKI ART FAIR XIII　ギャラリー檜B・C／東京
2010年　GALLERY HINOKI ART FAIR XII　ギャラリー檜B・C／東京
2009年　Mama Sept　世田谷美術館区民ギャラリー／東京
画廊からの発言2009-小品展　ギャラリーなつかb.p／東京
2007年　At Kugimachi　世田谷美術館分館清川泰次記念ギャラリー／東京
2005年　トーキョーワンダーシード　トーキョーワンダーサイト本郷／東京

国吉晶子

KUNIYOSHI Akiko

五感を使って

油彩画を制作している。モチーフはたびたび変わる。「家家」という油彩画を制作した。集合体としての家々を遠景としてとらえた風景画である。日常にどこか明るく、どこか空虚である。日常にありふれたものを、作家の視点を通して新しい世界におきかえ、鑑賞者に提示することを自己の課題としている。

幸か不幸か、私は高知に生まれ、今も住んでおり、身の周りにはモチーフとなるべき自然があふれている。足下には直に土があり、目の前には木や畑が広がる。夜、川の水が流れる音がきこえる。しかし、本当に描きたいものは、単なる美しい自然ではない。それらの中に潜む真実である。

私は自分の生まれ育った環境や価値観に基づき、それらの風景を絵に置き換える。視覚だけではない、五感をつかって。そんな行為は時に苦しい。しかし、作品を生みだす喜びはほかの何にも代えがたく、全身を洗い流してくれる。絵に教えられ、絵に気づかされ、自己の精神世界が深まっていく。そんな体験をこれからも繰り返し、成長していきたい。

今年は大河ドラマの影響で高知は観光客が例年以上に多いように思う。中心地にあった百貨店は数年前に閉店し、今年、大型娯楽施設となる。娯楽が悪いわけではない。急に署名活動を始め、反対する県民が悪いわけでもない。消費を一手に握る、郊外の大型ショッピングセンターが悪いわけでもない。「龍馬」と名のついたみやげ物を冷ややかに眺めながら、私は土地について考える。ここは、閉ざされた空間である。しかし芸術が、私を底なし沼のような世界へ導いてくれる。

幼い頃は、絵を描きながら、絵と一緒にダンスをしているような気分だった。しかし、今はただ一歩距離をおき、静かに向かい合っているような絵画を模索している。



キキ
キャンバス、油彩
97.0×130.5㎝
2011年



かわく森
キャンバス、油彩
162.0×162.0㎝
2009年



国吉晶子

1979年　高知県生まれ
2001年　女子美術大学芸術学部絵画科卒業

個展
2009年　かわく森　neutron kyoto／京都

グループ展他
2007年　NO BORDER 3　高知県立美術館／高知
2005年　ジーンズファクトリーコンテンポラリーアートアワード2005　高知市文化プラザかるぽーと／高知
2003年　5 ROOMS　高知県立美術館／高知

興梠優護

KOHROGI Yugo

The Origin of the World

飲まない・食べない・話さない。
自分以外に口の中を見られない方法。
叫ぶ・笑う・吐く・あくびをする。
自分以外にしっかりと、口の中を見せる方法。

口の中を外部にさらすということは、生きるということと直結する。
人は、自分の感情を押さえ込めないときにないたり叫んだりし、より遠くの人に声を届けようと、大きく口を広げる。
大きく開く口。それは身体や感情、理性を超えた、内側に収まりきれない何かが発露する瞬間の姿。底に見え隠れするものを起源と言おう。

３つの口で品という感じになる。上にあれば上品で下にあれば下品。
口と性器はどちらも、人間の入り口であり出口でもある。口が大きく開くことによってあらわになるものが、口蓋垂／のどちんこというのは、互いが同じような性質をもっていることに対しての、潜在的なあらわれではないか。

マネの画集を眺めながら、テレビの中で叫んでいる女優を観て、想ったこと。



□ 01
キャンバス、油彩
72.7×60.6㎝
2010年

I 22
キャンバス、油彩
130.3×80.3cm
2009年
(高橋コレクション所蔵)





興梠 優護

1982年　熊本県生まれ
2007年　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2009年　東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻版画研究領域修了

個展

2010年　火 | 花　Gallery Art Composition／東京
2009年　body nude/body　Gallery Art Composition／東京
　　melting point　CASHI／東京

グループ展他

2010年　Group Show II　CASHI／東京
　　Self Portrait-私という他人　高橋コレクション日比谷／東京
　　版画の色- リトグラフ　文房堂ギャラリー／東京
　　誠実な草　CASHI／東京
2009年　Group Show I　CASHI／東京
　　東京藝術大学修了制作展　東京藝術大学／東京
2008年　UTM伝統と現代　紙 - 刷り物 摺りもの -　浅草公会堂／東京
　　移行 umsteigen　オーストリア大使館／東京
　　真夏の夜の夢　CASHI／東京
　　トーキョーワンダーウォール展2008　東京都現代美術館／東京
2007年　東京藝術大学卒業制作展　東京藝術大学／東京
　　UTM伝統と現代　- 墨、単色の世界 -　旧坂本小学校／東京

http://oguy.jp

齋藤瑠璃子

SAITOH Ruriko

森の共犯者　郷のイリュージョン

私の実家はとても田舎だ。家は農家であり、実際、私も小学生のころ一人で栗拾いをしているときに、顔を上げたら鹿が目の前にいて逃げ帰ったことがある。とりあえずバッタリ会ってしまうような秘境の地である。家の前の山は少し歩けば野生の熊や鹿などをつくり生活している人間に家が建っている。山と田んぼの典型的な田舎の家である。家の前の山は少なくなってもうそこには行かなくなった。

山の入り口には〔男の神社〕と呼ばれるお堂があり、無人の神社と猿の神様と呼ばれるお堂がある。男の神社は山仕事をする人のための神社で、お盆に近所や山仕事をする人たちが数人で掃除をし、そこの無人の神社で酒を飲む。父がいつまで経っても帰ってこないので、母と神社に迎えに行ったら一人で寝ていたことがある。「つれていかれるとこだった」と言って起きたのが冗談でも怖い。猿の神様と呼ばれるお堂は、隣の家が管理しているのに私の家では猿の神様がいるからといって犬を飼うことができない。隣の家には犬がいるのはおかしい。それよりおかしいのはなぜ猿の神様が家の前にいるのか。

その山の砂利道をお盆で親戚みんなが集まった時に車でのぼり、何十年も前に作られた石を積んだだけのような人口の滝に行ったことがある。砂利道から林に入り少し同じところには行けなくて、わりと簡単にポンプみたいなものと灰色のプラスチック管があるし水源に辿りついてしまい、つまらなくなってもうそこには行かなくなった。

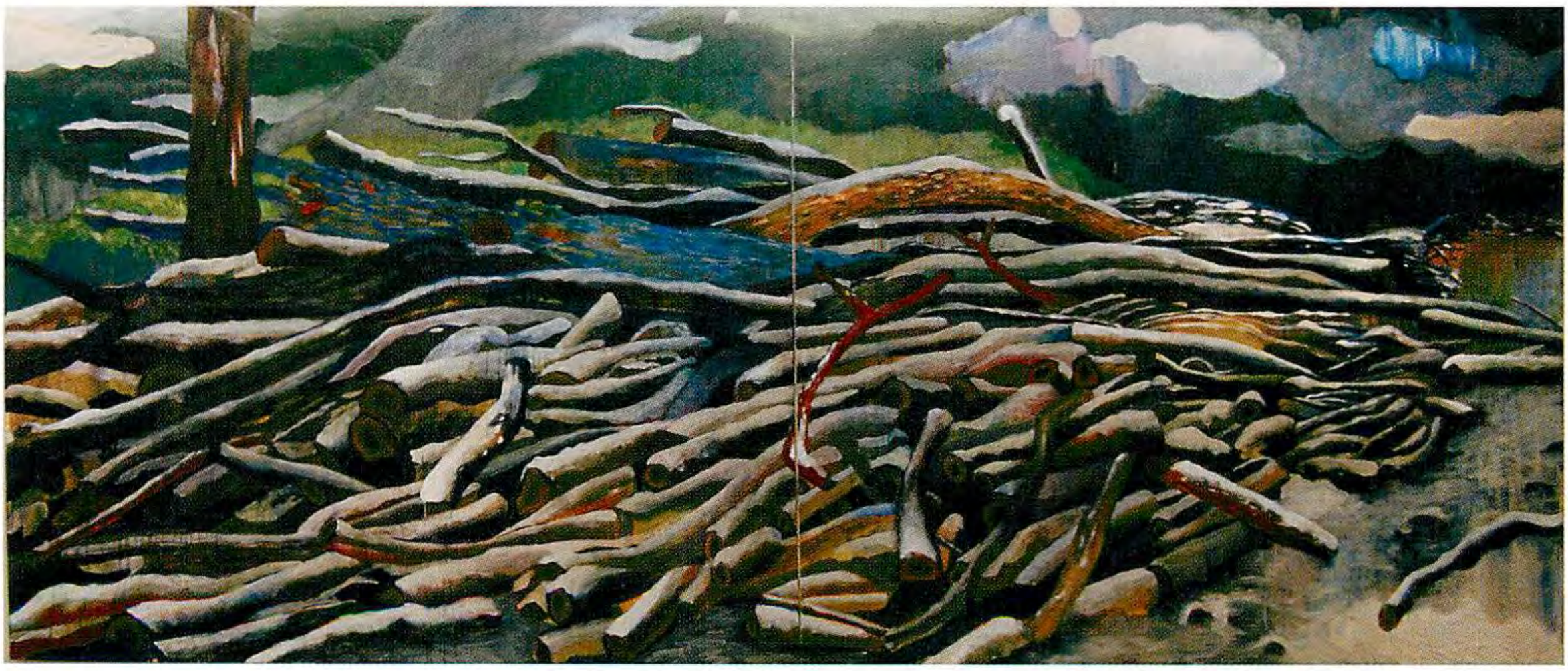
隣の幼馴染とある日探検ごっこで自分の家の池に流れてくる水の水源を探しに山へ出かけたことがある。最初は楽しく歩いて道もなくなり、やがて水以外に方向がわかるものがなくなってくると、幹と葉っぱが全部茶色の同じ格好をしてる木の団体がばっさばっさ音を出しながら、死にそうな鳥が鳴き、どこかで何かが逃げている音がする怖い森になってしまった。幼馴染は帰ろうと喚くし私も多少ビビッて「仕方ないなぁ」と、すぐに帰ることにした。あとでまた行きたいと思い一人探検に行ったが、

歩くと幅5メートルくらいの川がある。その川を石づたいに歩き上っていく。大きな石がごろごろあってコケがカラフルに生えている。コケの上にでかい蛙がまったく逃げずに私たち一同を見ている。たまに腰まで水につかり、川を上って歩いていくと虹がかかった大きな滝があった。積み上げられた石はコケが均等に生えていて、そこから流れ出る水は落ちいにしていて、行儀よくきれると同時に青緑色になり、魚が泳いでいるのが見える。捕まえようとしても捕まらない。そのうち飽きた大人が帰ろうと言い仕方なく帰る。何年後かに父と二人でお盆にその滝に行ったが、滝は小さくなっていて虹もかかってなくて、蛙も魚もいなかった。その帰りに軽トラから林を見たら全部同じ格好の木が生えていた。葉は真緑だが幹は肌色だった。写真を撮って絵に描いてみた。

とにかく、何か世界にはわくわくと違うところがあって、それは他ではどうにもピンと説明がつかないモノだから、描いたり作るしかないことなのかもしれないなぁと思う。

そして理想は今生きているべく常に新しく自分の中でまぶしく描けたらと思う。

maruta obake
キャンバス、油彩
130.3×388.0㎝
2011年



Zassou Obake
キャンバス、油彩
162.1×162.1㎝
2009年





齋藤瑠璃子

1984年　秋田県生まれ
2009年　多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業

個展
2011年　森の共犯者 郷の抽象化　ゼロダテアートセンター東京（3331 Arts Chiyoda）／東京
2009年　タイニーズカフェ／東京

グループ展他
2010年　3331シークレット・オークションvol.3　3331 Arts Chiyoda／東京
ゼロダテ／大館展2010　大館市商店街／秋田（'09）
outpost　TURNER GALLERY／東京
2009年　NEXT DOOR vol.9　T&G ARTS／東京
こなたかなた　TURNER GALLERY／東京
多摩美術大学卒業・修了制作展2009　多摩美術大学／東京
東京五美術大学連合卒業・修了制作展　国立新美術館／東京
2008年　ときめき鑓水ランデブー　相模原市民ギャラリー／神奈川
2007年　via art 2007　シンワアートミュージアム／東京

http://saito-ruriko.com/

酒井香奈

SAKAI Kana

描くということ

私の描く絵は、個人的経験、記憶、感覚など内からくるイメージや、外からの影響によって生まれるインスピレーションや身体から発生するリズムや動きが、絵の具の働きを導き、判断に次ぐ判断の結果、創り出される。判断の基準となるのは色彩の場合が多く、その時々の自分に敏感であるように、筆などは使わず、指で描いている。

描くにあたり、ドローイングやエスキースは一切しない。ドローイングをしないと忘れてしまうほどのビジョンであれば、描き残さなくてもよいと思っている。かといって、鮮明すぎるイメージやテーマを持っての制作は危険なことだと感じている。なるべくニュートラルな状態で、絵画とのやり取りを積み重ねられるよう、心がけている。

制作している過程で、ほんの一瞬でも、初めて体験する視覚的経験、感覚的な発見を感知して、画面につなぎ止めることができたと感じられた時に、描くのを終わらせるようにしている。

それは、手数や時間とは比例せず、描き始めた途端にやってくることもあれば、長く描いても、何も見えてこないこともある。だからこそ、絵を完成させ、共感を得ることが出来た時は、ただ単純に嬉しく、最も幸せな時である。

外界へ一歩踏み出せたような気持ちになる。そこにある絵画にはもはや私の絵としての意味はなく、そこに在るということが重要なこととなる。

作家が絵を描くというのは、自己の追求が根底にはあるが、絵画を描く道を選択した以上、社会との関わりを強く意識し、敏感であることが大切だと思う。

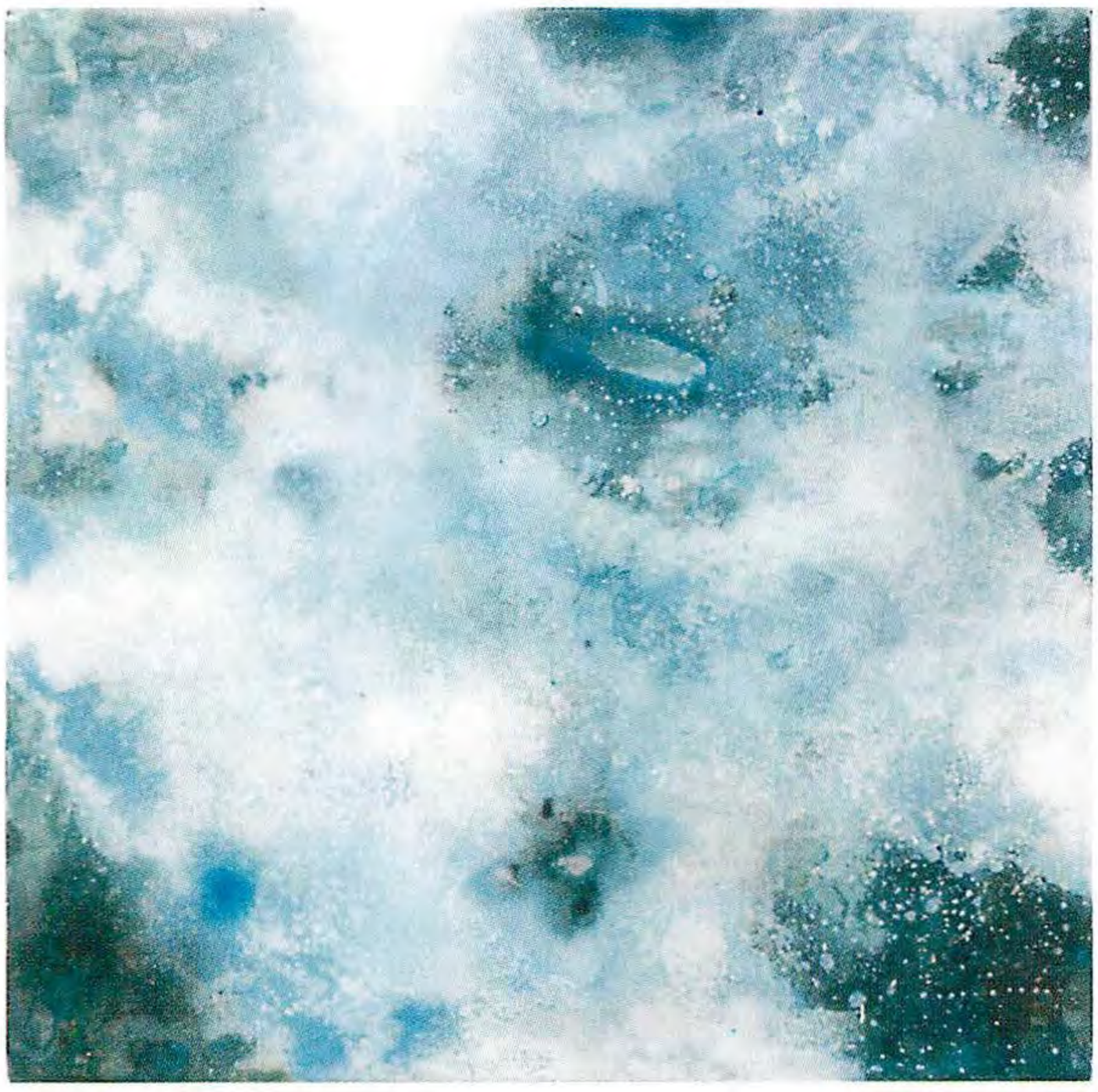
たとえ自分の絵画が、たわいのない、自分だけの錯覚の世界だったとしても、感覚を研ぎすませ、真摯に絵画に向かい合ったならば、絵を通して少しでも観る人と心を通わせることができるだろうと信じている。

そして観る人自身のビジョンを想起させ、重ね合わせてもらえれば幸いである。

絵には、私自身が隠しようもなく表れてし

まう。作家であるという以前に、人として
どうであるか問われる今、あふれる情報や
現象に惑わされることなく、しっかりと地
に足をつけて、深く感じ続けることを大切
にしたい。

絵画に見放されることのないよう、必死に
祈るように描いている。



のぼるゆき
パネル、寒冷紗、石膏地、アクリル
30.0×30.0㎝
2010年

ふくろうのゆめ
パネル、寒冷紗、消石灰、
顔料、アクリルメディウム
162.1×130.3㎝
2008年





酒井香奈

1969年　茨城県生まれ
1992年　武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業
1994年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2011年　ギャラリークローゼット／東京（西麻布）にて10月開催予定
2010年　ギャラリーなつか／東京
2008年　ギャラリーなつか／東京
1999年　藤枝晃雄氏企画展　ギャラリーαM／東京
　　セゾンアートプログラム ART-ING TOKYO 1999　ギャラリー檜／東京
1996年　ギャラリーアリエス／東京

グループ展
2010年　ビエンナーレ牛久2010　牛久市中央生涯学習センター／茨城
2009年　表層の冒険者たち—Vol.3　ギャラリーいしだ／東京
2001年　小林康夫によるセゾン現代美術館コレクション展－筆触のポリティクス＜絵画らしさとは何か＞－　セゾン現代美術館／長野
　　0号展　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
1999年　セゾンアートプログラム ART-ING TOKYO 1999 21×21　セゾンアートプログラムギャラリー／東京

http://www.sakaikana.com

坂本紀恵

SAKAMOTO Norie

面を被って、向かい合う

見えるものをそのまま受け取ること、感覚をぎりぎりまで研ぎ澄ますということは目に見えないけれど存在する何か、を感じ取ることに近いと感じるようになりました。すごく静かな部屋の中で耳を澄ますとき、自分の内側の音が聴こえてくる感覚とも言うことができます。絵を描くときにも、身体性と感覚的なもの、イメージと線が、思考が静止した場所で原始的につながってゆく感覚を見つけます。

最近制作したインスタレーション、「彼は何も持っていない事に気付いた、それでも語り続けた。」では、面（仮面）を作り、それが作品の主要な一部をなす、また部品が置き替え可能な立体を作りました。面とは、私にとって絵であるけれど身につけられるもの、また、付ける人によって意味合いが変わってくる、何かしらのパワーが宿る不思議な存在。そして物語が宿るきっかけであると同時にドローイングの要素も含みます。

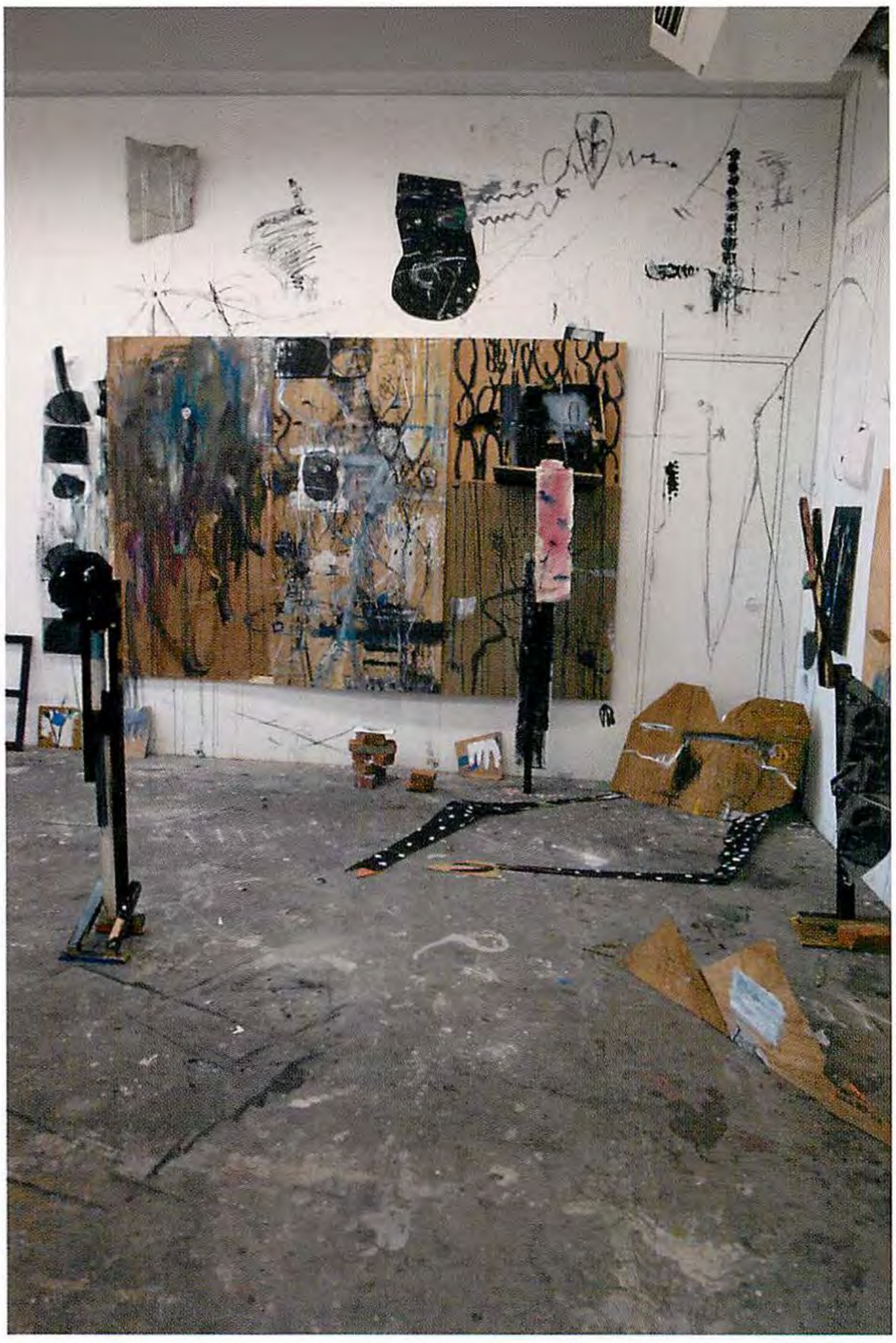
最近興味のある「能」では主要な登場人物の多くは死者や亡霊、異界の生き物、例えば石に宿った狐、あるいは戦いで負け滅ぼされた兵士などです。死者や異界の存在が生者の夢のなかに登場し、死者の目線から語る、つまりものがたりをものがたる、更にそれを演者（シテ）が演じます。演者は仮面をつけることにより、生者と死者をつなぐあいまいな存在となることができます。死者の悲しみやこの世への恨みを語り、歌や舞で表現した後に消えてゆきます。この芸能は昔の大衆の娯楽であった同時に神に捧げられるものでもありました。一つの面が、物語の内容によって違うキャラクターの役割をはたす、流動性も持ちます。面には何か強烈な魅力があると思います。

作品を作る前に、自分で作った物語や人から聞いた話、など設定をつくります。または、答えの出ない問いを作り、その問いの答えや、会ったことの無いある人物の、その人が見た光景、聞いた音、匂い、等を想像し、色や線に置き換えます。それらの線や色が積み重なり、次第にそれらが関係性を持ち始め、線が集まって形になり、形の関係が絡まってある関係性を持ち、次第に独立して物語をつくります。ある感情を

持った画面が立ち上がり、あるはまた別の物語へと発展していきます。

面をつけて世界を見ること、物語を作ること、どちらも「ほかの人になって世界を見てみたい」というところは共通していま す。見ることはどういうことなのか？それも自分ではないものの視点で。しかし他者を想像して手を動かしても、出来上がったものはぞっとする程自分の状態を晒していて、まるで不安定なお面（ペルソナ）です。

たしかにあるけれど、触れることは出来ないもの。目には見えない存在の、かそけき（幽き）声。私はそのような物語や宇宙目に見える形をもったものを作りたいと思っています。イメージと画面の間で揺れ動いている、何かの方が私にとって信頼出来る感覚。もし、異界の生き物や宇宙人の目を借りてこの世を見たら、人間の方が奇妙な、異形のものに見えるかもしれない。私は異形のものの面を着けて世界と人を見てみたいのです。



彼は何も持っていない事に気付いた、
それで彼は仮面を作り続けた。
インスタレーション
2010年

無数の蝶が浮かぶ川、
沈没船のなかで振り返ってはいけない。
インスタレーション
2010年





坂本紀恵

1987年　福岡県生まれ
2009年　多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業
2011年　多摩美術大学大学院美術研究科修了

個展

2009年　明滅する都市と、それを飲み込む大なまず　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
　　Sound of Silence　ギャラリー代々木／東京
2008年　坂本紀恵展　トーキョーワンダーウォール都庁／東京

グループ展

2010年　outpost　TURNER GALLERY／東京
　　間の無い国　Gallery LE DECO／東京
　　Go back to outer space　川崎ファクトリー／神奈川
2008年　Who's Next　MUSEUM at TAMADA PROJECTS／東京
2007年　ゲイジュツの夜明け展　ZAIM別館／横浜
　　トーキョーワンダーウォール公募2007入選作品展　東京都現代美術館／東京('08年)
　　まもの展　多摩美術大学芸術祭／東京
　　via art 2007　シンワアートミュージアム／東京

http://www.sakamotonorie.nigamushi.net/

佐藤　翠

SATOH Midori

私を導いてくれるもの

自分を奮い立たせてくれるもの、それは素晴らしいものを目にしたとき。

そんなとき、憧れの気持ちと幸福感に包まれます。

とりわけ、美しいものが視覚に飛び込んでくる時にそれは訪れます。

そして、そんな感情をずっと留めておきたい。

そう感じた様々な記憶は私の中で抽出されて、そして私は絵を描きます。

日常の中、街で大切に上質な洋服が並んでいる景色や、雑誌の中の素敵な部屋、美しい色合い、大事にされている古いアンティークのアクセサリーや家具、キュートなぬいぐるみ、洗練されたファッションショー、可愛くて美しいスーパーモデルや服、そんなものを目にしたときに感じられます。

視覚に入り、脳に、体に、伝わる良い刺激を求めています。

江戸時代に作られたとても綺麗な器や、ヨーロッパのアンティークの美しいお皿、見事な刺繍が施されたドレス、何千年も昔に建てられた宮殿や、想像を超える異文化の数々、そして美しい自然や街並。

今まで経験してきたことが、基盤となって私の想像力を掻き立ててくれます。

古くからあるシックで美しい建物が並ぶパリの街を歩いているととても心が踊ります。

スペインのアルハンブラ宮殿は、西洋の文化に中東の文化が混ざり合った装飾がとても印象に残りました。トルコのトプカプ宮殿や、アヤ・ソフィアの神秘的で美しい内装、エジプトのモハメッド・アリ・モスクもそうです。今まで見たこともなかった、想像もしなかったものに出会ったときの衝撃は心に残ります。私はそんな素晴らしいと感じたものをずっと覚えておきたいのです。それは私にそのときの喜びと感動を再び与えてくれるのです。自分の気持ちを向上させてくれるものであって、そういったものに囲まれていたい。

こだわりがあって、丁寧で、大切に作られたものに私は強く惹かれます。そういったものは以後何年経っても残りますし、普遍なものです。

普段の生活では、それとは対局なものとも

同居しながら生きていて、それは嫌な気持ちや空虚な気分、落ち込んだ気持ちや心が安らかではないことなどですぐ。些細なことでそうなってしまったり、自分ではコントロールできないぐらいまで大きくなってしまったり、その気持ちは自分をとても良くない方向に導いていくのです。こうした対局の気持ちにずっと支配されたくはありません。それに気付き、そこから抜け出すためにどうすべきか考えることはとても大切で、自分を見つめ直すことができるきっかけにもなります。

そこから、自分で立ち上がるすべとしての一つが、私にとって先に述べてきたものの力でもあるのです。

冴えない気分のときに、なにか素敵なものを見ることによって、自分を奮い立たせることもできるのです。そうして良い方向を見いだそうとまた前向きに考えるのです。そんな力をもっているもの、私はそんな絵を描きたいのです。



Yellow carpet
綿布、アクリル
145.5×112.0㎝
2010年

Shelf Ⅳ
アルミニウム、綿布、アクリル
194.0×112.0㎝
2009年





佐藤　翠

1984年　愛知県生まれ
2006年　France, Dijon国立芸術大学交換留学
2008年　名古屋芸術大学美術学部絵画科洋画コース卒業
2010年　東京造形大学大学院造形学部造形専攻美術研究領域修士課程修了
2011年　Cite Internationale des Art Paris, France滞在

個展

2012年　project N　東京オペラシティ／東京（初台）にて1月14日～3月25日まで開催予定
2011年　TKGエディションズ京都／京都（下京区）にて11月開催予定
2010年　TWS Emerging 140 「Blissful moments」　トーキョーワンダーサイト本郷／東京

グループ展他

2010年　ART AWARD TOKYO 2010　行幸地下ギャラリー／東京
Unique Commons わたしだけのみんなのもの　名古屋芸術大学 A&D センター／愛知
Open Studio　REV／神奈川
2009年　トーキョーワンダーウォール公募2009入選作品展　東京都現代美術館／東京
M-ポリフォニー'09　Zokei Gallery／東京
2008年　名古屋芸術大学選抜展「Selected Exhibition」　ギャラリー山口／東京
Atelier　名古屋市政資料館／愛知
ART AWARD TOKYO 2008　行幸地下ギャラリー／東京
モンブラン　ヤングアーティスト　パトロネージ　イン　ジャパン　Montblanc 銀座本店／東京
Art Program Ome 2008「ポストシアター」　青梅市勝沼公会堂／東京
2007年　Exchanged　名古屋芸術大学X棟ギャラリー／愛知

鈴木ゆかり

SUZUKI Yukari

作品について

私は、〝もの〟が持っている機能や意味以前に、その形体や雰囲気そのものを感じることが多い。

街並を自転車で走らせているときに出会った家や樹の、それらが持つ意味や機能あるいは時間や物語といったものは、私の中で瞬時にはがれ落ち、「そのもの」として立ち現れる。それは何かよく分からない新しい存在だ。

その存在を描くと同時に、それを取り囲む空気や空間も描きたいと思う。両者は画面の上で抽象的な形体と空間として描かれる。

作品には体感的に鑑賞されることも必要だ。そのため、身の丈かそれ以上のサイズのキャンバスに絵の具をのせていく。赤や青などの色面が拡がって観者を包み込む。絵画の形や色が織りなす空間は、身をゆだねることのできる解放された場であると思う。

私の目指す作品の体感性は、対象と対峙した際のリアルな感覚の再現に近い。

制作はいつも思い通りにいかない。つい、どこがまずかったのかと言葉で考えてしまう。

制作に言葉は不可欠だが、しばしばそれを越えてしまう。作品は言葉の外にあるのだろう。

今は、どのように作品に動的な要素を入れるか、ということを考えている。

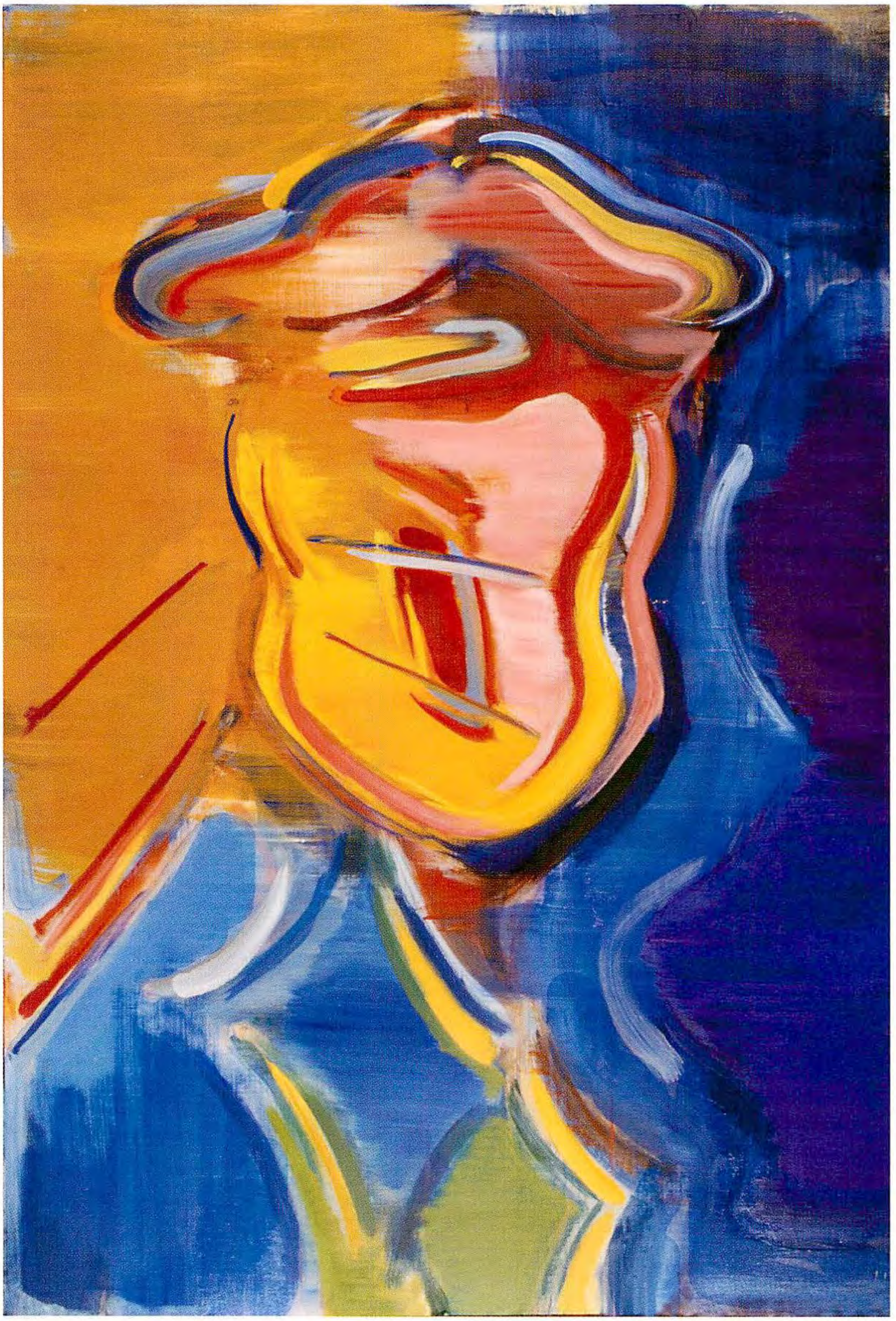
今までは一つ一つのモチーフを、瞬間的に知覚されやすい絵画として描いてきた。

それはある程度固定化された視点からモチーフを見てきたことによる。

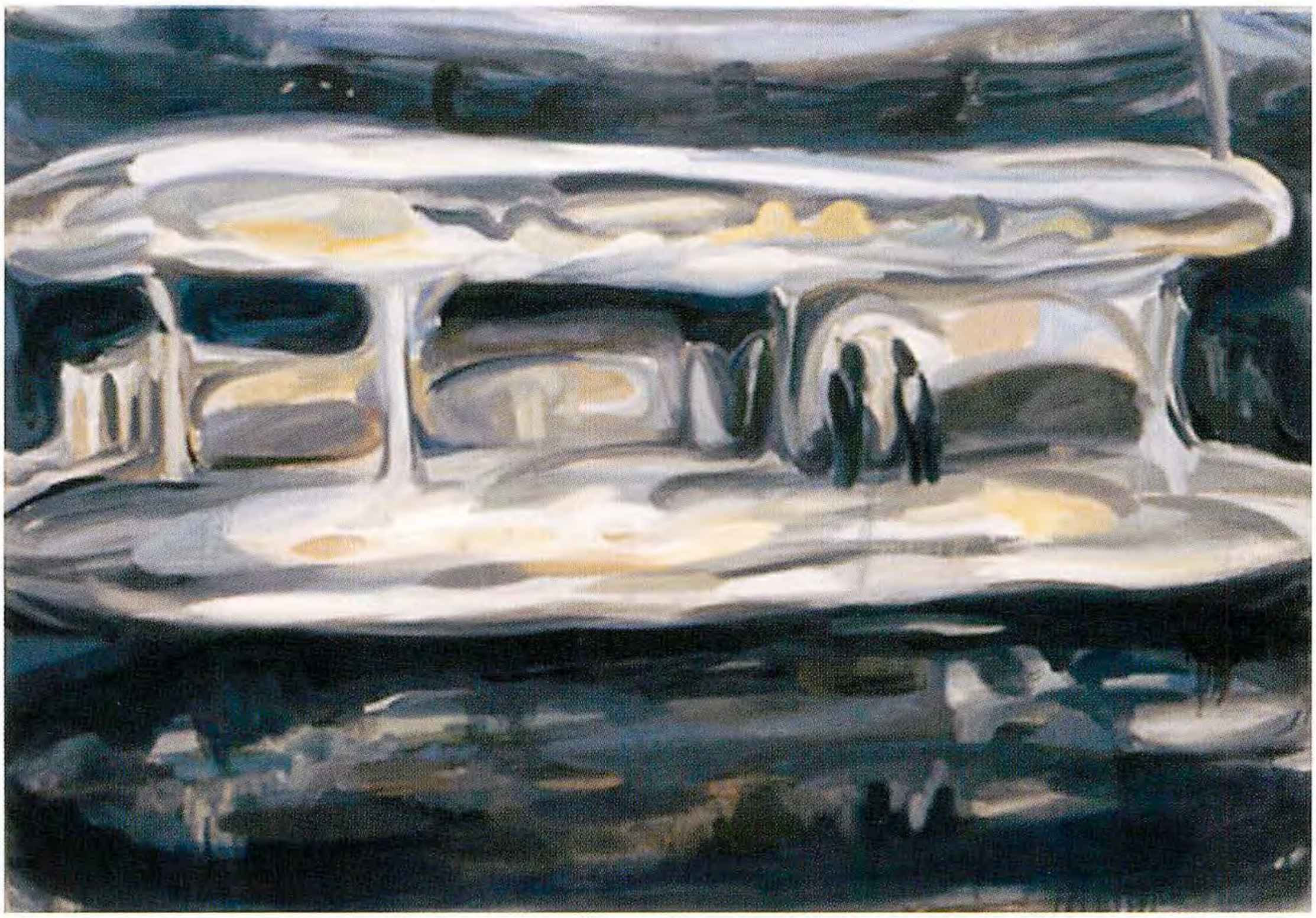
そのような絵画と並行して、複雑に形体や空間の層が絡み合うような時間的な要素の強い絵画を描きたいと思う。

自身が移動することによってモチーフの見え方は変化する。モチーフを描くという助けを借りて、つまりは身体の移動そのものを描きたいのかもしれない。

今後、一つの様式に留まらず様々な作品を制作していきたい。



A steep slope
キャンバス、油彩
194.0×130.5㎝
2010年



プラットホーム
キャンバス、油彩
112.0×162.0cm
2008年



鈴木ゆかり

1988年　東京都生まれ
2010年　女子美術大学絵画学科洋画専攻卒業
2011年　多摩美術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画研究領域在学中

グループ展
2011年　二人展　なびす画廊 / 東京（中央区）にて9月26日～10月1日迄開催予定
2010年　via art 2010　シンワアートミュージ アム／東京

武内明子

TAKEUCHI Akiko

帰る家

私は麻生家に住んでいる。友人の実家である。好きな場所は炬燵とベランダ。洗濯物が良く乾く。

高校卒業後上京し、予備校で一番に親しくなった麻生さん。それからというもの家におじゃましてはご飯をご馳走になり、泊まっていくことも多くなった。専用茶碗、専用歯ブラシ、専用寝巻き。五人家族にお邪魔して私はまるで座敷童子のようだった。本格的に住み着きだしたのは大学在学中、麻生のお祖母さんが頃だった。ガランとした麻生家。お姉ちゃんも結婚して家を出て行き、食卓を囲めば、四角いお膳の一辺に一人ずつ座れるようになっていた。友人とその父と弟との四人暮らしの始まりだった。

一日中家に居れば麻生家専属警備員。庭の剪定をすれば専属庭師。ときには家庭教師。小動物の巣作りのように下宿先からの荷物が日々少しずつ増えていった。家族で暮らす幸せ。いつの間にか私は麻生家の一員になっていた。もう座敷童子ではない。

堂々とご飯を食べ、お風呂に入り、壁を汚しながら絵を描く自分。あの世のお祖母さんが見たらきっとびっくりされるだろうな。なんて我が家は不思議。同じ建物の中に色んな人が暮らしている。時には入れ替わり去って行く。この家で暮らせることにしっかり感謝しなさい。

二〇〇九年春、友人の大学卒業をきっかけに私たちは日本各地を旅し、旅したことを作品にしてタリドリ計画』という活動を始めた。渡り鳥が暖かい場所と餌を求めて飛んでいくように私達も展示場所と作品の題材を求めてのので「ワタリドリ」と名付けた。今までに、北は札幌、南は天草、計10ヶ所で旅と二人展を続けてきた。まだまだ旅の途中です。

先日、久しぶりに埼玉の麻生家に帰って来た。勝手口を開けた瞬間、味わい深い我が家に懐かしさが広がった。



誕生日
白黒写真、油彩
10.0×14.8㎝
2008年



新潟の友人への手紙
宣紙、リトグラフ、モノタイプ
75.0×135.0（見開き）×05㎝
2010年



武内明子

1983年　熊本県生まれ
2008年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業

個展

2010年　宇城市不知火美術館／熊本
2009年　ギャラリーゴトウ／東京
　　shonandai MY Gallery／東京
2008年　新井画廊／東京
2007年　フリュウ・ギャラリー／東京
2006年　ギャラリー代々木／東京

麻生知子と武内明子の『ワタリドリ計画』～日本全国二人展の旅～

2010年　11月　第10回「たい焼が見た夢」　天草本渡銀天街／熊本
　　8月　第９回「火の国湯巡り」　熊本現代美術館／熊本
　　4月　第８回「新潟旅日記」　新潟絵屋／新潟
　　2月　第７回「渡鳥有限公司」　ギャラリーARK／神奈川
2009年　12月　第６回「喫茶愛知」　ギャラリー早蕨／愛知
　　11月　第５回「富士山が、無い」　静岡アートギャラリー／静岡
　　10月　第４回「岩手巡紀行」　ギャラリーlavie／岩手
　　9月　第３回「青森ツアー」　青森県立美術館ギャラリー／青森
　　7月　第２回「旅・家・長岡」　新潟県立近代美術館／新潟
　　5月　第１回「北海道」　札幌市資料館／北海道

田中秀介

TANAKA Syusuke

むき出しの末裔

毎日全てが不確かで、一つ一つ考える暇も無く全てが押し寄せてきて、受け止める間もなく流れてしまい、しかし、空腹。晩飯、寝る。また起きて働いて、「あれ、今日は祝日ですか？何日ですか？」となる。これが続くと月とか見る余裕は無くなるだろう。

そう生活スタイルというものは大胆に常々変わるものではなくて、確認出来る状況とか場面は一定になりがちで、そのなだらかな生活上では、生きていることを確認したいがためか、得体の知れない焦りから、理解を超えた状況、謎、緊張を渇望しているのに気がつく。かといって、「火、固まってくれないかな。空ともうちょっと接点もちたいな。うやうやしたもの、ぐわんとさせたいな。ありったけの土、盛りたいな」と呟いたところでなるわけでもなく、これはもうとりあえず直ちに描いて視覚化するほかない。私の描く初めの衝動は、この様な焦燥と欲から来ています。

ある時、人に「何を描いているのです か？」と聞かれて、「絵を描いていく中で今の状況は、良くも悪くも何でも描いて良いよ。何よ。」と課題は作家に委ねられていて、そうなると結局自分の過去とか記憶とか、深層心理を穿り返してぶちまける言葉しかなくて、その様なものを…。」と、自分でもよく理解していない、どうとでも取れる様なことを述べて、その上っ面の言葉が先行して、自由が利かなくなって、いよいよ虚無感。されど描き、画面上と体がいつしか私自身を操るようになり、また見合わなくて、分厚い本を勇ましい気分で開くも、自分の無知と経験の無さに打ちのめされて、一切共感、理解出来ず、得たものといえば、本はやはり重いということだけであって、そんな時、あっ！っとなって、これは私の望んでいる状態ではないと感じ、今は現実を、人の目を借りず自分の目で見て、自分の考えや言葉を冷静に、出来うる限り享受しようという考えに落ち着きました。

と、収まったところで、平然と捉えようの無い広大な日常がまたやって来るので、もう毎日、葛藤でも、矛盾でも、何でも良いから出し尽くす勢いで描いて生きて行こ

う。というのが今の理想です。

人が、ならば描くという行為を選択した歴史は長くて、何かしら大きな状況や環境の変化はあったのだけれども、何故かしら描いている人はずっといて、その欲の末裔であることに安心やら不安やら期待が募っていく日々です。



遇えない成り行き
キャンバス、アクリル、木炭
60.6×72.7㎝
2011年



時間の風
キャンバス、アクリル
112.1×145.5cm
2009年



田中秀介

1986年　和歌山県生まれ
2007年　大阪芸術大学附属大阪美術専門学校美術工芸学科絵画専攻卒業
2009年　大阪芸術大学美術学科油画コース卒業

個展
2010年　華やかな隔たり　2kw gallery／大阪
　　差し出る誤解　room.A／大阪
　　平穏のむきだし　Gallery & Café E·R·I+Y／奈良
2009年　信じがたい部分　Gallery Den 58／大阪

グループ展他
2011年　VISUAL SENSATION vol.4　Gallery Den mym／京都
2010年　3月 TASTING ART EXHIBITION　阪急メンズ館／大阪
　　10月 TASTING ART EXHIBITION 02　阪急メンズ館／大阪
　　ART SAN DIEGO CONTEMPORARY ART FAIR 2010　Hilton Hotel／サンディエゴ[U.S.A.]
2009年　S.S.S　Gallery Den／大阪
　　サントリー賞受賞特別展　薄い皮膚　サントリーミュージアム天保山／大阪
　　Art Camp 2009　Gallery Yamaguchi Kunst Bau／大阪
　　トーキョーワンダーシード2009　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

http://shusuketanaka.j imdo.com/

中島　麦

NAKAJIMA Mugi

僕は毎晩2時間旅をする

僕は電車の窓から外の景色を見ていることが好きだ。

目の前に現れては通り過ぎていく風景、見ているものの残像のようなものだけが記憶として積み重なっていく。どんどん重なっていく記憶の澱は混ざり合いながら、僕の中に入っていく。

車窓から見た45都道府県。残りあと2つ。全部行けば良いってもんではないけれど、行ったことのない所へ行くこと、知らない所の空気を吸うことは旅の醍醐味だ。もちろん、ほぼ毎日乗っている阪急電鉄京都線の車窓も、それはそれで良いけれど、初めて乗るローカル線からの風景はまた格別。海に沈む夕陽、迫ってくる緑の木々、人のいない暗い路地、夜の光る看板、青すぎる夏の田んぼ、トンネルに吸い込まれる錆びた線路…

雑然としていて、とりとめもないところが、いかにも日本らしくて美しい。

〝通り過ぎていく一瞬の景色は、同じようで違う景色。

生きている毎日は、いつもと同じようで違う毎日。〟

現在、僕はデザイン系の専門学校で基礎造形の教員をしていて、週5日はおおよそ決まった時間の中で生活をしている。そして、普段は家に帰ってきてからの夜の数時間が、作品に向き合う制作時間になっている。

僕の絵を描くことは、まず水彩や色鉛筆やペンなど手軽な画材で、はがき大くらいの小さな紙にドローイングすることから始まる。なるべく次の展開や打算的なことは考えずに、記憶が新鮮なうちに次々描いていく。1枚あたりにかかる時間はおおよそ数分、長くても30分程度。この運動のような行為は、自分の目で見たもの、体験したことを身体に取り込む大切な作業。そして、描いては出すことを繰り返しながら、そして取り込むことを繰り返しながら、タブロー作品への純度を高めていく。

〝絵を描くことは、はっきりしているようでとてもあいまいな世界を、手ざわりのある距離に実体化していく作業、記憶の記録です。〟

もちろん、毎日どこかへ出かけるわけではない。僕の毎晩の旅の行き先は、小さな家の中の小さなアトリエ。
慌ただしく通りすぎる毎日の中で、少なくとも夜に『旅をする気持ちで絵を描こう』そんな旅の記録が、見る人にとって普遍的な記憶になればうれしい。



moment of color drawing
水彩紙、 写真、透明水彩、
アクリル、ガッシュ、
色鉛筆、各種ペン類
サイズ可変-約1300枚
(各10×10㎝～20×20㎝)
2009～2010年

moment of coler
キャンバス、アクリル
91.0×72.7㎝
2009年





中島　麦

1978年　長野県生まれ、大阪府育ち
2002年　京都市立芸術大学美術学部油画専攻卒業

個展

2011年　Gallery OUT of PLACE ／奈良（今辻子町）にて9月8日～10月9日迄開催予定
六花亭／北海道（札幌市）にて9月1日～30日迄開催予定
僕は毎晩、２時間旅をする　ギャラリー 301 ／兵庫
2010年　moment of color "NARA"(NARA ART PROM)　名勝大乗院庭園文化館茶室／奈良
moment of color 2010　ギャラリーはねうさぎ／京都
moment of color drawing　ギャラリー 301 ／兵庫
moment of color　エスプリヌーボー／岡山
moment of color 08-10　愛知川駅ギャラリーるーぶる愛知川／滋賀
2009年　moment of color ～記憶のスクラップブックより～　ギャラリーはねうさぎ / 京都
moment of color　海岸通ギャラリー CASO/ 大阪 ('08)
2008年　KYOTO ART MAP 2008 水～循環とつながり～　ギャラリーはねうさぎ／京都
NAKAJIMA MUGI Exhibition 2008　石田大成社ホール／京都
2007年　a moment garden ～ green ～　石田大成社ホール ICB ／京都
a moment M's garden　muse osaka ／大阪
NAKAJIMA MUGI Exhibition　HOUSE OF ART Gallery ／京都 ('04 ～ '06)
2005年　麦印展 2005　Gallery B-Life Cafe ／京都 ('04)
麦印展～ garden ～　ギャラリーはねうさぎ／京都
2003年　麦印展　ホワイトキューブギャラリー KYOTO ／京都
麦印展　同時代ギャラリー／京都

グループ展他

2011年　中島麦 × 武内健二郎（詩人）　STREET GALLERY ／兵庫、ギャラリー 301due ／兵庫、ON THE BOOKS ／大阪
2010年　架空通信 百花撩乱　兵庫県立美術館／兵庫 ('09)
Jamin4　エスプリヌーボー／岡山 ('09)
VISQ　ヴィンテージ家具ショップ／大阪
BOX 美術館展 9　ギャラリーはねうさぎ、京都国立近代美術館野外、京都市内の小中学校／京都 ('05'07 ～ '09)
2009年　CROSS THINKS'09　海岸通ギャラリー CASO ／大阪 ('08)
第 2 回六花亭ファイル　六花文庫／北海道・札幌 ('07)
2008年　3 人のアーティストとデザイナーによるカフェ改造実験プロジェクト Vol.1　agio iichan.chi ／京都
Promising Art　ギャラリーはねうさぎ／京都
2006年　このまま､あっという間に　シティギャラリー、ホワイトキューブ OSAKA ／大阪
2005年　ヨシ紙を使った展覧会　石田大成社ホール／京都
芸術家の線　石田大成社ホール／京都
こみまる展 2005　吹田歴史文化まちづくりセンター『浜屋敷』／大阪 ('04)
2004年　THE LIBRARY 2004　Gallery ART SPACE ／東京、Gallery そわか／京都
AMUSEART JAM 2004　京都文化博物館／京都
2003年　Naive Art Ⅵ「麦印良品計画」　Pepper's Loft Gallery ／東京
大黒湯～ 2 つのあいだ～　元銭湯・大黒湯／東京
COMMUNICATION ART Ⅵ「麦印～ RULE」　Pepper's Loft Gallery ／東京

福島沙由美

FUKUSHIMA Sayumi

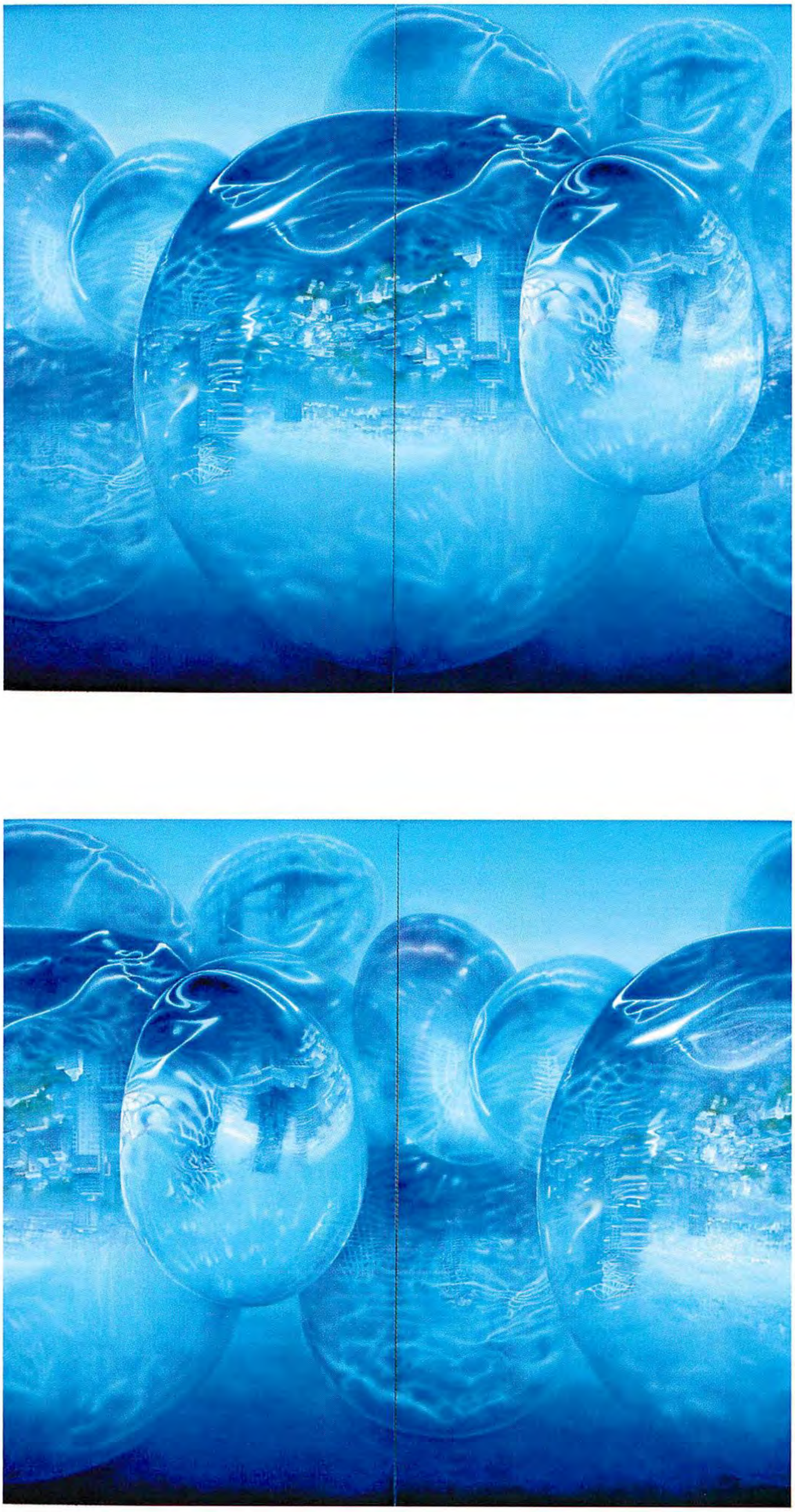
虚像の解れ

私は「視点」をテーマに自分で創ったガラスの球体の中を水で満たし、そこに映し出された虚像の風景を描いています。ヒトの目はレンズと似ていて、ものを見て、それを認識する際、眼球の網膜に上下左右反転した像が投影され、その像を視神経で脳に導き、脳内でも更に逆転した像で処理され、逆さに見えている筈なのに、正常な像として認識されるという。もし、脳内でそうったら、このガラス球の像が処理されなかの世界で生活していたのかもしれない。

ガラスの球体に映り込んだ虚像は目線の角度、立ち位置が少しでも変わると虚像のカタチも少しずつ変容する。ガラスに映り込んだ街が少しずつ溶解していく。原型を留めぬぐらい街が溶けていく。いや、見方、考え方を変えると歪んだカタチが少しずつ再生しているかもしれない。ガラスの中の風景は解体と再生を繰り返す。ただ、私の創ったガラスの球体は円では無い、球体の中にワザとひずみを入れている。故に虚像は解体と再生を繰り返すが、再生されたとしても、どこかしら解体を予感させる「解れ」が生じる。

私はこの虚像の解れを「記憶」と捉えている。日々、蓄積される記憶。古くなればなるほど、形は崩れ、細部は徐々に消滅する。断片的に残った記憶は欠乏した記憶を埋めるため、別の情報と繋ぎ合せて再生されることがある。継ぎ接ぎだらけの記憶は次第に記憶の歪みへと変容する。私は記憶の歪みを球体の中に蒐集する。

ものの見方は一つだけでは無い。絵にも多様な見方があっても良いのではないか。組み合わせによって見え方が変わっていく絵。私は、組み合わせにより別の視点が見えてくる作品を制作しています。例えば、A、Bという絵が個々に存在する。それらを繋げてABという一つにすることができ、また入れ替えてBAとも見ることができる絵を描いています。現在は複数のもので展開させようと試みています。



視点の道標
キャンバス、油彩
上：（A、B）194.0×112.0㎝×2枚1組
下：（B、A）194.0×112.0㎝×2枚1組
2010年

浸染　39.5℃
キャンバス、油彩
130.3×194.0㎝
2008年





福島沙由美

1982年　　東京都生まれ
2011年　　東京藝術大学大学院美術研究科修士課程油画専攻在学中

個展

2011年　Gallery Art Composition／東京
2010年　上野の森美術館ギャラリー／東京
2009年　トーキョーワンダーウォール　東京都庁／東京
　　トーキョーワンダーサイト本郷　東京
2008年　ギャラリーQ／東京
2006年　ギャラリーQ／東京
2005年　ギャラリーQ／東京

グループ展他

2011年　アートフェア東京2011　東京国際フォーラム／東京
　　TOKYO FRONTLINE　3331 Arts Chiyoda／東京
2010年　Contemporary Art from Tokyo　松山三越デパート／愛媛
　　藝大・茨城大・筑波大卒業修了制作選抜展　東海ステーションギャラリー／茨城
　　TOKYO WONDER WALL 2000-2009　10年！　東京都現代美術館／東京
　　KINGYO のきんぎょ展　Part3　GALLERY KINGYO ／東京
　　KIAF 2010　COEX ／ソウル [韓国]
　　財団法人佐藤国際文化育英財団　第19回奨学生美術展　佐藤美術館／東京
2009年　COREDO Women's Art STYLE ＜Spring Story 2009＞　COREDO日本橋／東京
　　第26回上野の森美術館大賞　入賞者展　上野の森美術館ギャラリー／東京
　　The Concentration 展　ギャラリー Q ／東京
2008年　コジマ文化週間　旧小島小学校／東京
　　第26回上野の森美術館大賞展　上野の森美術館／東京
　　アジアトップアートギャラリーホテルアートフェア2008　ホテルニューオオタニ／東京
　　トーキョーワンダーウォール公募2008　東京都現代美術館／東京
2007年　The Party　ギャラリーQ／東京
　　サスティナブルアートプロジェクト2007 事の場　旧坂本小学校／東京
2004年　熱い紅茶も冷める距離　Gallery Conceal／東京

MASAKO

日常

生まれてからずっと日本に住み続けている　何がしたい
が、今まで自分の国について考えたことは　何が出来る
ほとんどなかった。せいぜい歴史の授業か、
スポーツ選手などスターの話。
だが、周りのこと、世界のことを知った気
になっている。
ＴＶやインターネット、ゲームから得る情
報を自分の中のリアルとしてそれが当たり
前のように吸収してきた。
世の中で起きている、喜ばしいこと、悲し
いこと、それも一緒くたに二次元の画面で
見た物を信じている。
会話も情報の反復からなり、毎日新しい
ニュースを味見する。
夢や希望を語るも、何か熱を帯びない。情
熱、熱血たる物を表に出すのを恥じらいと
するほどである。
しかし、「私は皆と違う」と皆が思ってい
る。内に熱い物を秘めながらも、外では冷
たいプラスティックみたいな（正確には表
面をコーティングされた）人間が多いよう
に思う。
これが今の私の生きる日常である。



SCHOOL
キャンバス、アクリル、水性ペンキ、墨
194.0×259.0㎝
2008年

Untitled(Man)
パネル、キャンバス、紙、アクリル、油彩
90.0×60.0㎝
2010年



MASAKO

1987年　埼玉県生まれ

個展

2010年　every day　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2009年　トーキョーワンダーウォール2009：MASAKO-Material　東京都庁／東京
2008年　MASAKO-MY HOME　Galerie Sho Contemporary Art／東京

グループ展他

2011年　Art Nights　Mancy's Tokyo／東京
2010年　EMERGING DIRECTORS'ART FAIR ULTRA 003　スパイラルガーデン／東京
2009年　ART@AGNES 2009　アグネスホテル／東京
CLARA DESIRE+MASAKAO+大槻素子　Galerie Sho Contemporary Art／東京
SCOPE Miami Art Show 2009／マイアミ[U.S.A.]
2008年　Galerie Sho Projects 7人の新人展　Galerie Sho Contemporary Art／東京
トーキョーワンダーウォール2008　東京都庁／東京
101 TOKYO Contemporary Art Fair 2009　アキバ・スクエア／東京
2007年　アミューズアートジャム2007 in 京都　京都文化博物館／京都
シェル美術賞展2007　代官山ヒルサイドフォーラム／東京

装丁：猿駅/初恋（田中哲哉）、ファミリーポートレイト（桜庭一樹）、monkey business vol.2ねむり号（文芸誌）

松本菜々

MATSUMOTO Nana

Sequence／シークエンス

私は何かしらの対象を描く事が目的ではない。意味や概念を備えたモノが保持する色彩や形態は、それ自体で目に留まることなく私たちの目の前を通り過ぎていく。何気ない日常の中にはビルボード、コップ、カーテン、本、建物、衣類などの様々なモノが溢れている。それらにはまるで商品に付属されている説明書や、宣伝の活字、注意を促す記号のように、達成すべき目的に応じた意味や概念が付与されているが、それはこの社会を構成しているシステムやコードにおいてそこに在るのだ。

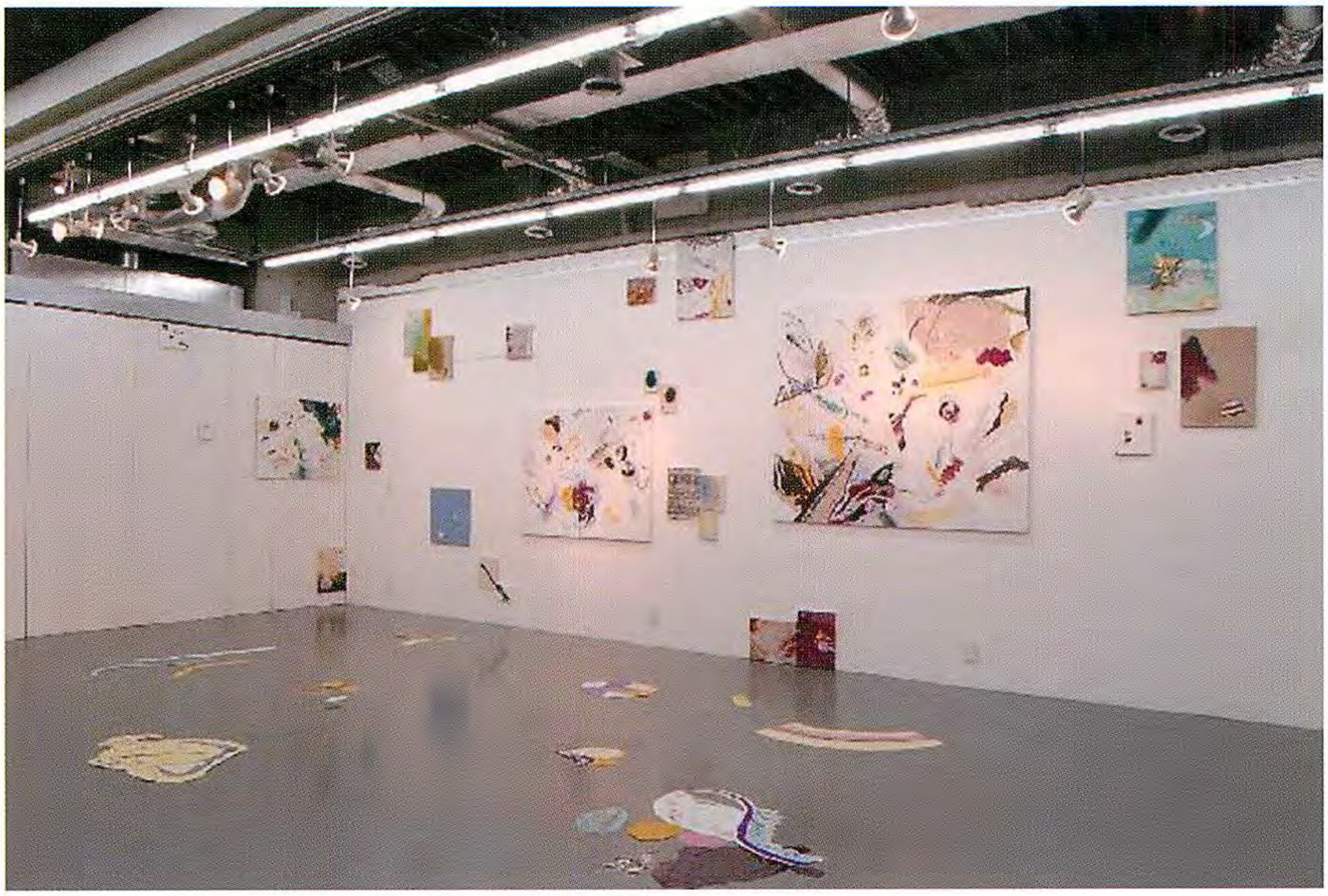
私は一度そのものを、質量や意味や概念から解放させたうえで、質量や素材といった元素的次元に還元すると共に、それによって対象のける相違を捉え直したい。つまり、視点背後や周りにあるドラマを掘り出しつつ複数のテクストを提示するように複数の解釈をもたらしたいのだ。

文学や音楽、芸術など、あらゆる分野には共通する根源的な思考や、断片的構造の集合によって私はヒントとしての対象と発話的に関わる事で少しでもそこに近づきたい。

発話行為、それは絵画と関わる私にとって絵の具を練って落とす事であり、オイルで溶いた薄い顔料を画面に垂らし、筆やナイフで絵の具を定着させる、削る、拭うといった一連の行為の事だ。そうしたあらゆる手法で対象と関わる時、画面上での配置や色彩、類似した形態から抽出した要素を併置したり転用すること、個々のフォルムの転移や集中および分裂、彩度の異なる色彩の対比などで画面上の諸問題の中に対象と根源的な思考等との関係性が見えて来るのだ。画面上での戯れやそうした出来事のその度ごとに反応し、実感していきたいと考えている。



drop paintings
キャンバス、油彩 、アクリル
各100.0×80.3㎝（2点1組）
2011年



opera
壁：各キャンバス、アクリル、油彩
床：各ミクストメディア
インスタレーション（サイズ可変）
2009年



松本菜々

1986年　千葉県生まれ
2008年　東京造形大学絵画専攻領域卒業
2010年　東京造形大学大学院造形学科造形専攻修了

個展
2010年　Its justflitted　atelier K irigiris／神奈川
　　On the flat　ギャラリー坂巻／東京
2009年　トーキョーワンダーウォール2008　東京都庁／東京

グループ展
2010年　Art Fair in SPAZIO 1 YOGA"Another Approach to Arts"　+PLUS spazio1 YOGA／東京
2009年　M-polyphony'09　ZOKEI gallery／東京
　　Roots of one　トーキョーワンダーサイト本郷／東京

http://nana-matsumoto.com

吉住　暁

YOSHIZUMI Aki

目の前の広がり

絵画は動く。

大きくなったり小さくなったり。近づいたり離れたり。鮮やかになったり濁ったり。もちろん絵画自体はピクリともしない静物だから、みる者・距離・場所・時間・あらゆる状況により「在り方」が変化する、ということ。絵画は固定されないという方が近いだろうか。

鑑賞者は絵画と対峙した時、そこに描かれているイメージをみると同時に絵画というモノそれ自体を前にしている、つまり否が応でも絵画が在る空間に身をおくことになる。イメージはみる者になにかしらの形や記憶を投影させるだろう。しかしモノとして空間に在ることにより形や記憶の延長線上ではない新たな光景が広がる。その目の前の広がりこそ、固定されることのない絵画だ。問い続ける。私の描く絵は固定されていないのか？いや、まだうまく空間に存在できないでいる。

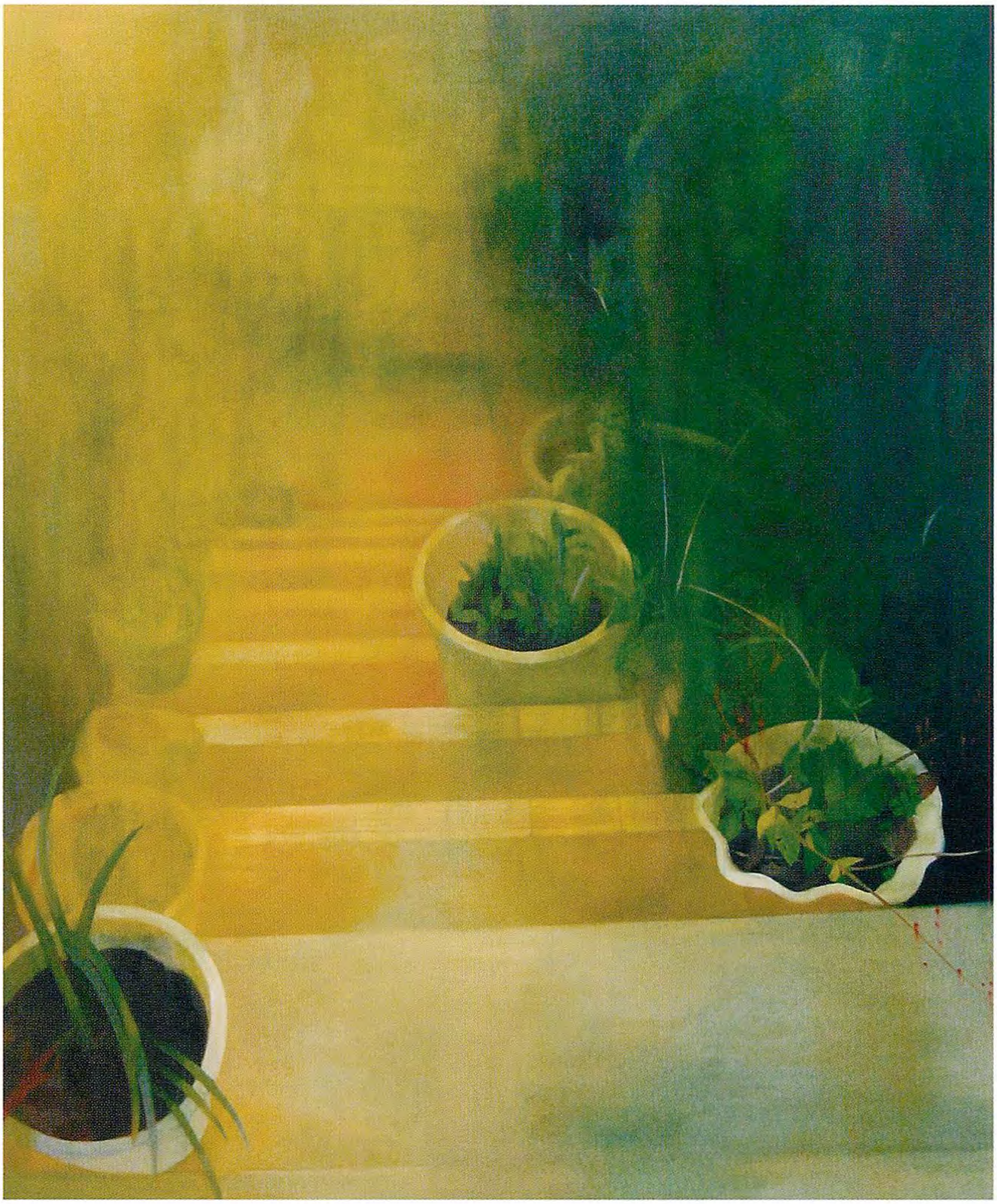
生まれ育った海岸のある街、松林、飛行機の窓から見下ろす雲とビル、地下鉄、ファミレス、川沿いのマンション、街路樹、ささやかな庭、通り過ぎる人。日常的に目にする何気ない風景は光や匂いや音、風、湿度があり、雰囲気がある。そしてなによりも生と死がもつある種の静けさと美しさに満ちている。

『生きている』という不思議の闇の中を泳ぎながら画面上に断片を落とし込み、思考・探求し、選択し、見失い、沈むように、色・素材・形態の中に没入していく。その繰り返し。

繰り返すことで自分の限界を微量でも押し上げる、これが私にとっての制作。

筆を置いてあれこれ考えを巡らせてできた想像の光景は可能性にあふれ完璧なのに、一旦筆を握り色をのせればさっきまでの完璧な像はあっさりと姿を消す。

時折、絶望的な気持ちになるが画面上での仕事によってしか救われないのだから仕方がない、また筆を握る。



空間
キャンバス、油彩
194.0×162.0㎝
2011年



目の前のつづき
キャンバス、油彩
145.5×227.3㎝
2009年
photo by　洲崎一志



吉住　暁

1978年　福岡県生まれ
2002年　多摩美術大学美術学部絵画学科卒業
2004年　多摩美術大学大学院美術研究科修了

個展

2011年　景　Gallery 58／東京
　　ギャラリーとわーる／福岡
2010年　空　Gallery 58／東京
2009年　門　Gallery 58／東京
　　ギャラリーとわーる／福岡
2007年　Gallery 58／東京
　　ギャラリーとわーる／福岡
2005年　Gallery 58／東京

グループ展

2011年　コンテンポラリーアート小品展　ギャラリーとわーる／福岡
2010年　Art ∞ Message－吉住暁・池田聡子展　ギャラリーとわーる／福岡
2009年　新世代への視点2009小品展　ギャラリーなつか／東京
2007年　シェル美術賞展2007　代官山ヒルサイドフォーラム／東京（'04）
2004年　絵画　村松画廊／東京

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊2011

発行日　2011年7月1日発行
定　価　1,000円（本体953円）
発行所　ホルベイン工業株式会社
　　東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人　吉村信夫
編　集　倉田妙子

holbein